安芸国分尼寺跡

—第2次調査概報—

1979

広島県教育委員会

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）

Ⅱ　調査の概要……（2）

　　1　既往の調査……（2）

　　2　調査の経過……（2）

　　3　調査日誌……（6）

Ⅲ　検出の遺構……（8）

Ⅳ　出土遺物……（16）

Ⅴ　まとめ……（25）

挿　図　目　次

第１図　安芸国分尼寺伝承地付近地形図……（２）
第２図　調査区配置図……（折表）
第３図　第１―ａ調査区遺構実測図……（８）
第４図　第１―ｄ調査区遺構実測図……（９）
第５図　第２調査区遺構実測図……（10）
第６図　第３―ａ調査区遺構実測図……（11）
第７図　第７―ａ調査区遺構実測図……（13）
第８図　第７―ａ調査区遺物出土状態実測図……（13）
第９図　各調査区北壁断面実測図……（14）
第10図　須恵器実測図……（16）
第11図　土器実測図……（19）
第12図　土製品実測図……（21）
第13図　木製品実測図（１）……（22）
第14図　木製品実測図（２）……（23）
第15図　木製品実測図（３）……（24）

図　版　目　次

図版１　ａ　安芸国分尼寺伝承地付近々景（西より）　ｂ　第１調査区全景（西より）
図版２　ａ　第１―ａ調査区遺構（東より）　ｂ　同　上（東より）
図版３　ａ　第２―ａ調査区遺構（東より）　ｂ　第２―ｂ調査区遺構（西より）
図版４　ａ　第２―ｄ調査区遺構（北より）　ｂ　同　上　杭出土状態（西より）
図版５　ａ　第３―ａ調査区遺構（北より）　ｂ　同　上　（東より）
図版６　ａ　第３―ａ調査区杭列（北より）　ｂ　同　上・杭出土状態（東より）
図版７　ａ　第６―ａ調査区（西より）　ｂ　第６―ｂ調査区（東より）
図版８　ａ　第７―ａ調査区遺物出土状態（西より）　ｂ　同　上　（南より）
図版９　ａ　第７―ａ調査区溝状遺構（北より）　ｂ　同上　掘立柱検出状態（南より）
図版10　ａ　出土須恵器　ｂ　出土土師質土器，青磁，白磁，その他
図版11　ａ　出土木製品　ｂ　同　上
図版12　ａ　出土木製品　ｂ　同　上
図版13　　出土木製品

例　　言

Ⅰ　本概報は，昭和53年12月14日から昭和54年１月26日までの間に実施した安芸国分尼寺伝承地の第２次調査概報である。

Ⅱ　発掘調査は文化庁から補助金の交付を受け，広島県教育委員会が実施した。

Ⅲ　本概報の執筆・編集は松村昌彦が行い，遺物の実測は松村のほか桑原隆博，製図は中田　昭，植田千佳穂，岡本啓子，夏川芳子，出土遺物の写真撮影は中田が行った。

Ⅳ　本概報に使用した方位はすべて磁北である。

Ⅴ　遺構，遺物における記号は，溝状遺構をＭ，溜池状遺構をＳ，杭及び杭列をＫとした。

I はじめに

安芸国分尼寺跡の発掘調査は文化庁から補助金の交付を受け，昭和52年度から実施しているもので，第1年次は，航空写真による測量図の作成と寺域の確認を主目的として調査を行ったが，本年度は第2次調査として国庫補助金100万円，県負担100万円，計200万円をもって，昭和53年12月14日から昭和54年1月26日までの25日間実施した。

本寺跡が所在する東広島市西条町吉行一帯は国鉄西条駅の北側にあって交通至便の地であるため，近年，急激に宅地化が進行し遺跡破壊の恐れが生じている。このため安芸国分寺跡については昭和44年から46年にかけて発掘調査を行い，遺構や寺域を確認したほか，史跡指定地の拡大，一部公有化の実施等により保存対策を進めており，その活用についても検討がなされているところである。

これに対し安芸国分尼寺跡は，これまで国分寺跡東方の字尼寺の地に存在していると伝承されていたが，明瞭な遺構が確認されないまま，今日に至っている。このたび，道路取付け計画，ほ場整備事業計画など周辺の整備計画が立てられ，その事業がすすめられることになったため，早急に遺構や寺域を確認し，保存対策を講ずるため，遺構確認の調査が必要となってきた。

昨年度の第1次発掘調査は地元で国分尼寺跡と伝承されてきた「にんじ(尼寺)堂」付近から開始したが，明確な遺構を確認することができなかった。しかし，「にんじ堂」から約130 m西方の第9，10調査区では基壇状の遺構，築地溝とみられる遺構を確認したほか，木簡，瓦，須恵器類などが出土し，地形的にも前述の「にんじ堂」付近よりも有力地として注目された。このため本年度の第2次発掘調査はこの地点と国分寺跡との間を調査地として実施することになった。

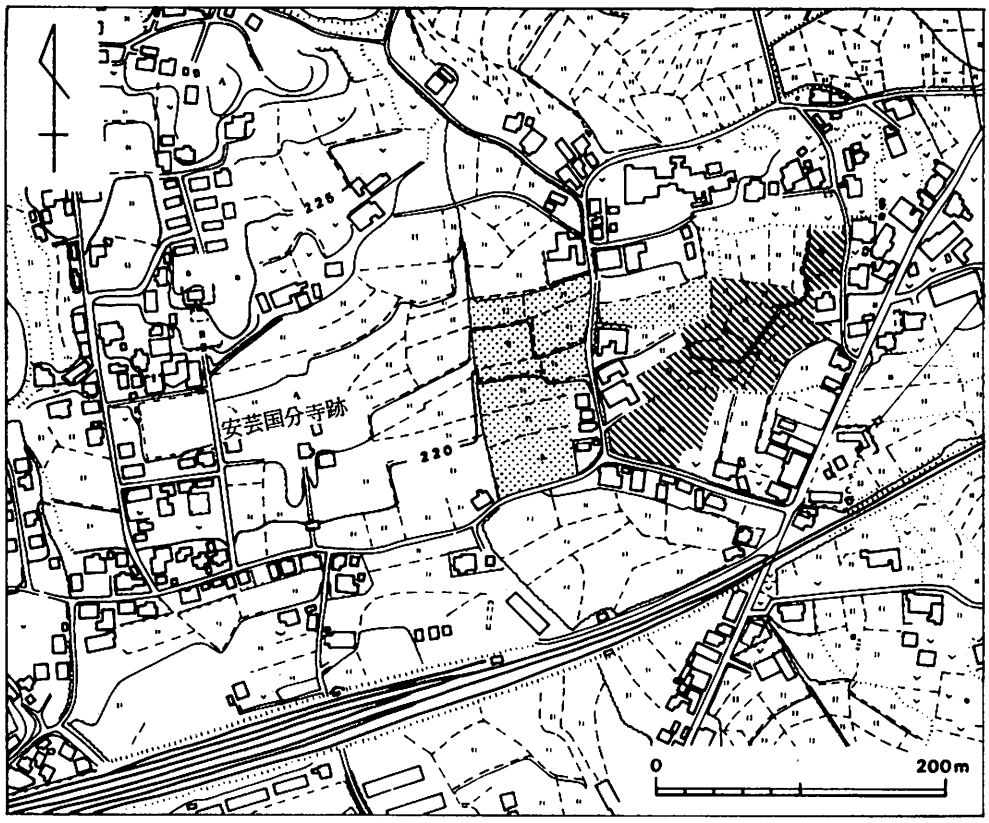
発掘調査は，県教育委員会文化課が実施したが，東広島市教育委員会，東広島市土地改良区，土地所有者である梶原幸雄，末成康訓，末成義明の各氏をはじめ地元の方々からは多大の協力を得ることができた。記して謝意を表したい。

Ⅱ 調査の概要

1 既往の調査

本寺跡については古くから国分寺跡東方の「にんじ（尼寺）堂」と呼ばれている付近と伝え，また「にんじ堂」から南に約50mの変電所の工事中に奈良時代の須恵器が出土したといわれているが遺構の状況等は明らかでなく今日に至っている。

昭和52年度の第１次発掘調査は字伽藍，尼寺一帯がほ場整備の計画地となっていることから字尼寺の地内に19ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した。その結果，国分尼寺跡と伝えられてきた「にんじ堂」付近では遺構，遺物とも検出されず「にんじ堂」から約130 m西方の字伽藍との境付近に設定した第９調査区で基壇状の遺構，第10調査区で溝状遺構を確認した。この溝は寺域の東側を画す築地溝である可能性が強く，瓦，須恵器，木簡，木製品などが集中して出土したが，礎石などの遺構は確認され



第１図　安芸国分尼寺伝承地付近地形図

52年度調査

53年度調査

なかった。なお，第9，10調査区に近接した第11～13調査区などからは中世の溝状遺構，土坑などが存在した。

2 調査の経過

・第1次調査による第9，10調査区の遺構が国分尼寺跡に伴う遺構である可能性があることから，本年度はこの調査区と国分寺跡東端との間を調査地区とし，各所にトレンチを設定した。

なお，本年度は田地が北から南に0.5～1.0mの比高差で棚田地形となっており，一田地ごとに遺構が存在する可能性があることのほか，トレンチによる調査地の拡張などを考慮して一田地を一調査区として各トレンチを設定し，これをa・b・c……と小区分して調査を行った。

第1調査区―東からa区（1.5×10m），b区（1.5×6.5m），c区（1.5×10m）を設定し，a区に溜池状遺構（S11）の東端，b区にその西端を確認したが，本遺構の上部堆積層には中世の遺物は存在するが，遺構内での出土はなく，溝底より須恵器が出土したことからみて少なくとも中世以前とみられた。またa区を東に約6m延ばして溝（M11～13）を確認したが，これらの遺構はトレンチ内では切り合い状態がみられないため，a区の南にd区（2×7m）を設定して遺構の範囲等について調査を進めた。この結果，溜池状遺構はd区まで及んでいないことが明らかになった。また，d区では溝状遺構を確認したが，この溝はa区の溝（M11）と幅，深さともほぼ同じであり，位置的にみても同一の溝と考えられたが，他のM13やS11との関係については明らかにすることができなかった。

第2調査区―第1調査区の西の水田に東からa区（1.5×10m），b区（1.5×8m）c区（1.5×10m）を設定し，a区には東西方向にのびる溝状遺構，a区からb区にかけて幅4.0～4.6m程度の浅い落込みの遺構，またb区には南北にのびる幅40cmの溝状遺構，西端では約15cm下って溝状となって杭及び杭跡を確認し，この杭列を追って，d区（2×8m）をb区に直交して南側に設定した。この結果，d区内からは，まばらに連なる杭列が存在し，北壁の土層断面によるとb区と同様に幅50～60cmの溝状遺構の部分に杭を配しており，これら溝状の遺構は出土遺物，土層の状態からみて中世のものと判断された。なおc区では遺構は確認されなかった。

第3調査区―第1調査区の北にa区（1.5×10m），b区（1.5×10m）を設定した。a区は北側では地山まで浅く約40cmを測るが，南と西側に急に落込むことから南側を

拡張して溝状遺構（M31，32）を確認し，またこの溝を東側に追って溝（M33），溜池状遺構（S31）と杭列を確認した。西側の落込みは溜池状遺構とみられるため西端の立上りを追ってb区を東に延長したが，確認できなかったためa，b区間に，小トレンチ（1.5×2.0m）を設定した。この小トレンチ内では土層の観察の結果，溜池状遺構（S32）が続き，S31とは位置的にみて別のものと考えられた。なお，S31はM31を伴うが，杭列及び土層を確認した結果，このM33がS31が埋まって後に杭列を伴うS31がおそらく改修されたとみられる状態を確認した。すなわち中世遺物を伴う4層はこの遺構上に堆積している。このことからM31は中世頃と判断されたが，M31やS31の遺構内からは中世の遺物は検出できず中世以前の遺構とみられた。

第4調査区—第3調査区の西側の水田にa区（1.5×10m），b区（1.5×5m）を設定したが，ここは，かって数十年前は宅地であったためすぐに地山となっており，遺構は存在しなかった。

第5調査区—第1調査区の南側の水田にトレンチ（1.5×10m）を設定した。地山面は東端付近で傾斜をみせることから東にさらに3m延長したが，傾斜は緩かで地山面まで深く，このような緩かな堆積層は第8，第9調査区にもみられ溜池状遺構ではないかとみられたが，立上りが緩かであることから凹地への単なる包含層である可能性が強い。

第6調査区—第5調査区の西側にa区（1.5×10m），b区（1.5×10m）を設定した。東側のa区では西端で地山面が下り，最下層の土は溜池状遺構の堆積土に特有の黒褐色土層であることから西に2.5m延長してこれを追った。西側のb区内最下層にもこの黒褐色土が堆積しており，多量の木製品や須恵器，瓦類が出土した。これらの溜池状に落込む部分は遺構であるのか単なる窪地に遺物包含層となっているのかについては判断し難いが，4層がなく他の調査区の5層に相当する層が比較的厚く堆積をみせることから溜池状遺構である可能性が強い。

第7調査区—第5調査区の南の水田にa区（1.5×7m），b区（1.5×10m）を設定したがa区では板状木製品，自然木などが出土したことから北側を拡張してこれを追った。この結果，これらの遺物は南に下る溝状遺構内に存在しており溝底から瓦が出土し，下部堆積層には中世の遺物を含まないことから本遺構は中世以前と判断された。また本遺構から東に約1.2m東側において柱材を確認したが溝状遺構との関係については現在のところ明らかではない。なお，b区には遺構は存在しなかった。

53-4
53-3
53-1
53-2
53-10
52-16
53-5
52-17
53-6
53-7
52-9
53-8
52-10
52-11
53-9
52-12
52-13
50m

第2図　調　査　区　配　置　図

第8調査区―第6・7調査区の南の水田にa区（1.5×10m），b区（1.5×10m）を設定した。a区は1.0～1.2mで地山に達し，地山の直上には溜池状遺構内にみられるような黒褐色土が約20cmの厚さで堆積しているが急な落込みはみられない。b区は耕土の下はすぐ地山となっており，遺構は確認されなかった。このことからa区は凹地あるいは東に緩傾斜となる自然地形における堆積層ではないかとみられた。

第9調査区―第8調査区の南の水田にa区（1.5×10m），b区（1.5×7.5m），c区（1.5×10m），d区（1.5×7m），e区（1.0×5m），f区（1.0×5m）を設定した。a区からb区にかけて溜池状に落込む部分があり，c，d区と次第に地山面が高く，d区では薄い床土の下はすぐに地山となっている。e区は，地山面が花崗岩の風化した砂層で，この上に黒褐色土が堆積しており深さが相当にあることから溜池状遺構とみられたが，約22m西に設定したf区の土層及び地山面の傾斜を考慮すると，a，b区の落込みと同時の状態とみられ，第1，3区にみられるような溜池状遺構とはやや異なることから地形が凹地となり堆積層となっているのではないかとみられる。

第10調査区―第1調査区の東に道を隔てた水田中にa～c区（1.5×8m）を設定したが，ここはもと上下2段となる水田で，上段を削平して現在の水田にしたといわれ，調査の結果すぐ地山となっており遺構，遺物は存在しなかった。

以上のように各調査区のうち第7―a調査区で柱材を確認したほかは寺跡に伴う建物跡は確認されなかった。また溜池状遺構や溝状遺構，調査南半の窪地の状態から判断してこの地は早くから田畑地として利用されていた可能性が強い。

3 調　査　日　誌

昭和53年12月14日（木）晴

発掘調査用具を調査地に運び，東広島市教育委員会社会教育課，高綱係長らと協議を行う。

第1調査区　a～c区の排土を開始し，a，b区間に溜池状遺構を確認する。

12月15日（金）晴

第2調査区　a～c区の排土を開始し，a区東側に中世の溝状遺構を確認したほか，a，b区間に遺構の一部を確認した。またb区西端付近に杭が存在した。

12月16日（土）晴

第3調査区　a，b区の排土を開始し，a区に溝，溜池状遺構の一部を確認する。

12月18日（月）晴

第4調査区　a，b区の排土を開始するが，すぐ地山となっており遺構はない。

第5調査区を設定し、排土を開始する。

12月19日（火）曇時々晴

第6（a，b）7（a，b）8（a，b）9（a～d）の各調査区を設定し耕作土を剥ぐ。

12月20日（水）晴時々小雨

第1調査区　a区の東端に溝状遺構を確認し，東側の立上りを追うため東に拡張する。

第3調査区　a区の溝状遺構（M31）から中世の下駄が出土。また溝を東側に追って拡張する。このほか西端の溜池状遺構を確認のためb調査区との間に小トレンチを設定する。

12月21日（木）晴のち曇

第1調査区　a区は東に拡張を進めて溝（M11～M13）を確認する。d区はa区の遺構を南側で確認のためトレンチを設定し，排土を行う。

第3調査区　a区の排土を続行する。

第5調査区　東側に拡張する。

12月22日（金）晴のち小雨

第1調査区のd区，第3調査区のa区の調査を続行する。

昭和53年1月8日（月）晴

第3調査区　a区は東側拡張部で木片多数が出土する。また溝の立上りを追って南に拡張する。

第7調査区　a区は板材，枝などが出土。b区は耕作土の下はすぐ地山となっており遺構はない。

第8調査区　a区は地山面までが深く，溜池状遺構または凹地状になっているとみられる。

1月9日（火）晴

第2調査区　a，b区は清掃，c区は清掃後写真撮影，土層断面図を作成する。

第3調査区　a区の溝（M32）を確認する。

第6調査区　a区は西端が落込みとなり，b区は排土を続行する。

第7調査区　a区は遺物検出のため北側に拡張し，b区は埋めもどしを行う。

1月10日（水）曇

第1調査区　d区の排土を続行する。

第2調査区　a，b調査区は写真撮影，土層断面図を作成し，c区は埋めもどしを行う。

第3調査区　a区遺構内の排土を行う。

第6調査区　a区は写真撮影，土層断面図を作成し，b区は排土を続行する。木製品，須恵器などが多く出土する。a区と同様の落込みとみられる。

1月11日（木）曇

第1調査区　a区は土層を検討し，d区は排土を続行する。

第2調査区　a，b区とも写真撮影，土層断面図，遺構平面図を作成し，埋めもどしを行う。

第3調査区　a区の東南拡張部に杭列を確認する。

第6調査区　a区は埋めもどしを行い，b区は排土を続行する。

1月12日（金）曇

第1調査区　a，b区は土層断面図を作成し，d区は清掃を行う。

第2調査区　埋めもどしを行う。

第5調査区のa区，第8調査区のa区を清掃する。

1月13日（土）曇のち雨

第1調査区　a，b区の土層断面図を作成し，b区は埋めもどしを行う。

第5調査区　写真撮影，土層断面図を作成する。

第6調査区　b区の排土を行う。

第10調査区　排土を開始する。

1月16日（火）晴

第1調査区　d区の写真撮影，土層断面図を作成する。

第5調査区　埋めもどしを行う。

第6調査区　b区の排土を行う。

第8調査区　a区の写真撮影，土層断面図をとる。

第10調査区　a～c区の排土の結果，耕作土の下はすぐ地山となり遺構はない。

1月17日（水）小雨

第1調査区　溝（M13）の立上りを追い，土層断面図を作成する。

第6調査区　b区の掘下げを完了する。

第8調査区のa区，第10調査区のa～c区の埋めもどしを行う。

1月18日（木）雨のち晴

午前中は雨のため遺物を整理し，午後は各調査区の水抜きと清掃を行う。

1月19日（金）晴

第1調査区　a区の清掃，写真撮影を行い，d区とともに遺構の平面図を作成する。

第8調査区　b区の排土の下はすぐ地山となり，埋めもどしを行う。

第9調査区　a～d区の排土を行うが西側のd区はすぐ地山で，b，c区は地山が東に下っている。a区は西に傾斜し，この間が落込みとなっている。

1月20日（土）晴

第7調査区　a区の清掃，写真撮影，木製品の実測を行う。

第9調査区　a，b区は排土を完了し，b，c区は写真撮影，土層断面図を作成のほか，e，f区を設定して排土を行う。

1月21日（日）晴

第1調査区　d区の埋めもどしを行う。

第7調査区　遺物を取り上げ，溝底を確認する。

第9調査区　a，f区の土層断面図を作成する。

1月22日（月）晴

第1調査区　a，d区の埋めもどしを完了する。

第2調査区　b区西端の杭列を追って，d区を設定して排土を開始する。

第7調査区　a区の柱材を写真撮影，実測を行い，溝状遺構の平面図を作成する。

第9調査区　d，f区の埋めもどしを行い，f区は排土を続行する。

1月23日（火）晴

第2調査区　d区に杭列を検出する。

第3調査区　清掃を行う。

第7調査区　写真撮影，土層断面図を作成し，埋めもどしを行う。

第9調査区　a～c，f区の埋めもどしを行う。

1月24日（水）晴

第2調査区　d区の写真撮影，土層断面図を作成する。

第3調査区　a区の写真撮影，土層断面図を作成し埋めもどしを開始する。

第9調査区　地山面まで深さ1.8 *m*を測り，水の浸透量が多く，壁面崩壊の恐れがあるため一部排土を放棄し，花粉分析のためのサンプルをとり，土層断面図を作成する。

1月25日（木）晴のち曇

第2調査区　d区の平面図，杭列の写真撮影およびこれを取り上げる。

第3調査区　a区の土層断面図を作成し，杭の取り上げを行い，埋めもどしを開始する。

1/100にて今年度調査の各調査区のトレンチ配置図を作成する。

1月26日（金）晴

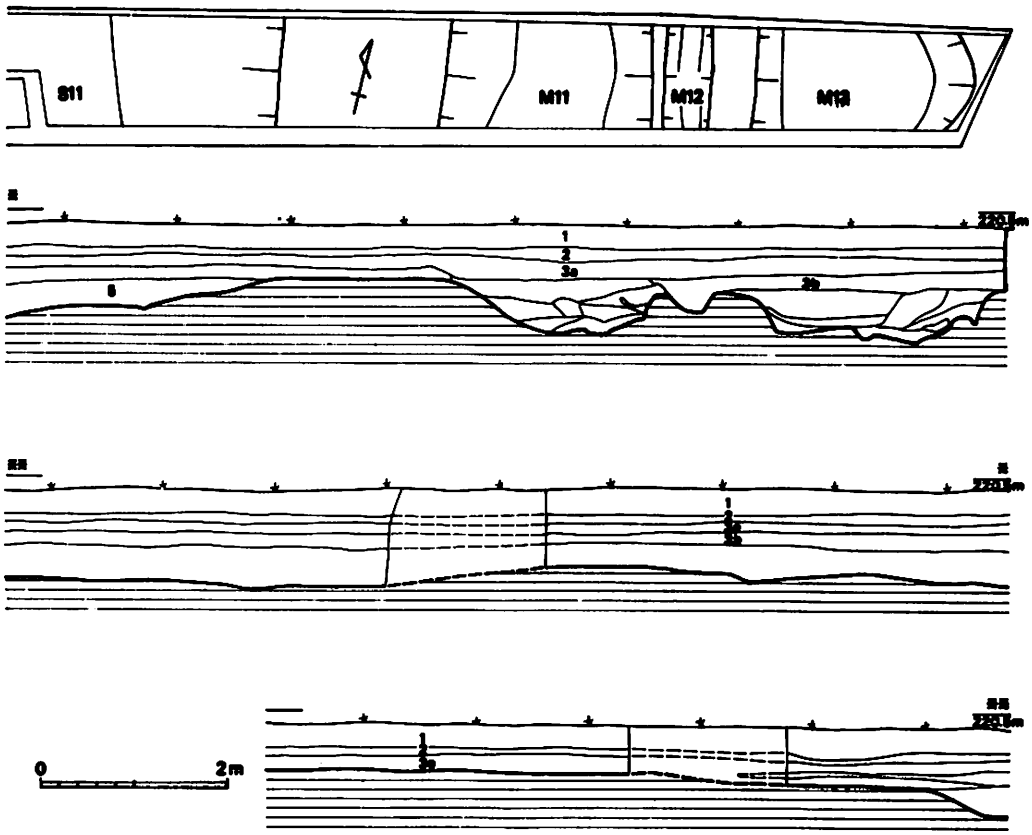
第2，3調査区の埋めもどしを完了し，各調査区のレベル等の点検を行い，本年度の調査を終了する。

Ⅲ 検 出 の 遺 構

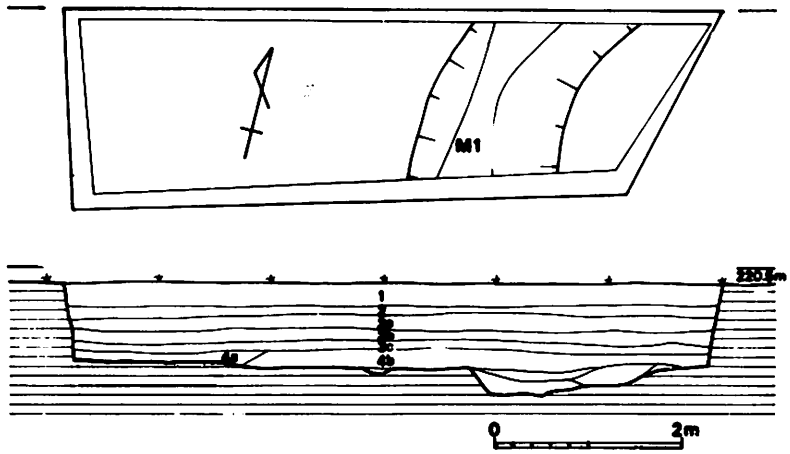
確認した遺構は各調査区ともトレンチによる調査のため規模及び相互の関係については明らかではないが，国分寺期頃とみられるものと，それ以降とみられるものとがある。

第1調査区の遺構（第3，4図）

この調査区では溝状遺構3と溜池状遺構1を確認した。a区の溝状遺構のうちM11はd区の溝に続くとみられ，溝底から多くの木片が出土した。幅は上端で約220㎝，溝底で100～120㎝を測り，深さは現表土から約110㎝，地山面から40～55㎝を測る。M12はM11に並行しており，幅は上端で約50㎝，溝底で約20㎝を測り，深さは地山面から15～20㎝で，断面U字型を呈している。M13はM12から約50㎝東に離れて並行している。幅は上端で約250㎝，溝底で約150㎝。深さは地山面から40～50㎝を測る。



第3図　第1－a調査区遺構実測図



第 4 図　第1—d 調査区遺構実測図

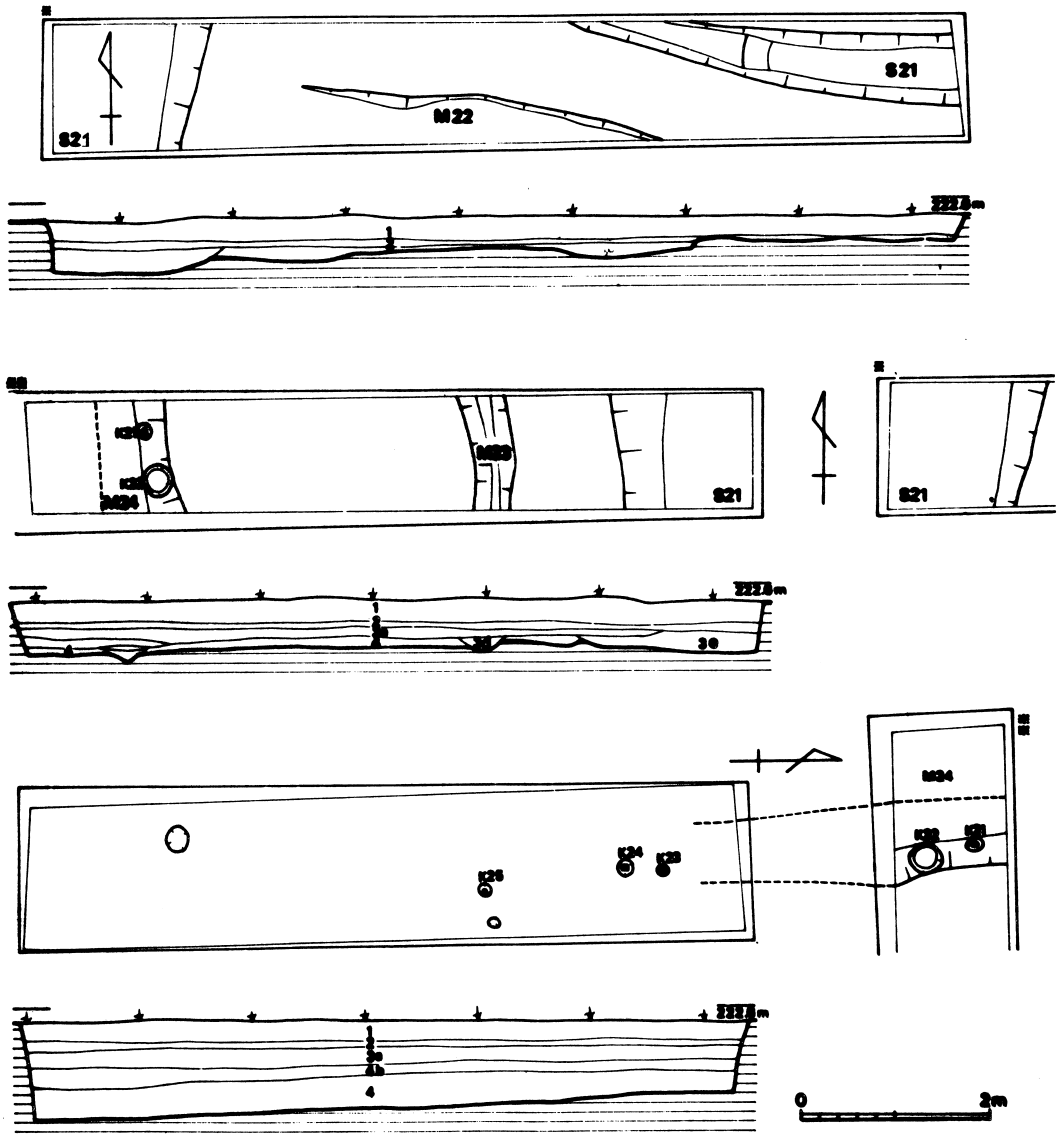
なお，溝底は非常に堅く暗灰色を呈し，その上に須恵器片，木片を含む砂質の黒褐色土が堆積している。

溜池状遺構の規模は東西約15.4mを測るが南北の規模については不明である。なおd区内にはこの遺構はかかっていない。深さは現表土から約130cm，地山面から40～50cmを測り，第3調査区のS32の溝底との差は約10cmであるが，切り合い関係を有する別の遺構である可能性が強い。溝内には下層に部分的に青灰色土，暗灰色土があるが全体的には黒褐色土が厚さ30～40cmに堆積し，須恵器片，木片などを包含しているが中世遺物は含まない。また，西端底面から出土の須恵器壺片が出土していることから本遺構は少くとも平安時代には存在していたとみられる。

第2調査区の遺構（第5図）

この調査区では溝状遺構4と溜池状遺構1を確認した。a区東端の溝のM21は厚さ5～6cmの床土のすぐ下にあって，幅は上端で40～75cm，溝底で30～40cm，深さは現表土下45～55cm，切り込み面から約20cmと浅く東に若干下っている。M22はこの溝に並行しており，南側は未確認であるが若干立上りをみせる部分があることからM21とほぼ同規模程度の幅をとるとみられる。深さは切り込み面から約20cm前後で西端は次第に下って不明瞭で，a区西端からb区東端にかかる溜池状遺構との関係は明らかではない。b区のM23は溜池状遺構の西約1.2mに位置して，幅は上端で40～50cm，溝底で10～15cm，深さは現表土下約55cm，切り込み面から約20cmを測る。M24はM23か

ら西に約3m離れて位置し，幅は北壁土層断面にみられるように上端で50～70cm，深さ約20cmでM23と同様にⅣ層を切り込んでいる。また溝に沿って杭及び杭跡が存在しており，この遺構を南にd区を設定したところ，浅い溝は南に下っており杭も点在していた。つぎに杭の配置はNo.1と杭跡No.2との間は約50cm，No.3とNo.4との間は約40cm，No.5は約150cm離れており，No.2とNo.3との間は未確認であるが1ないし2本が存在しているとみられる。

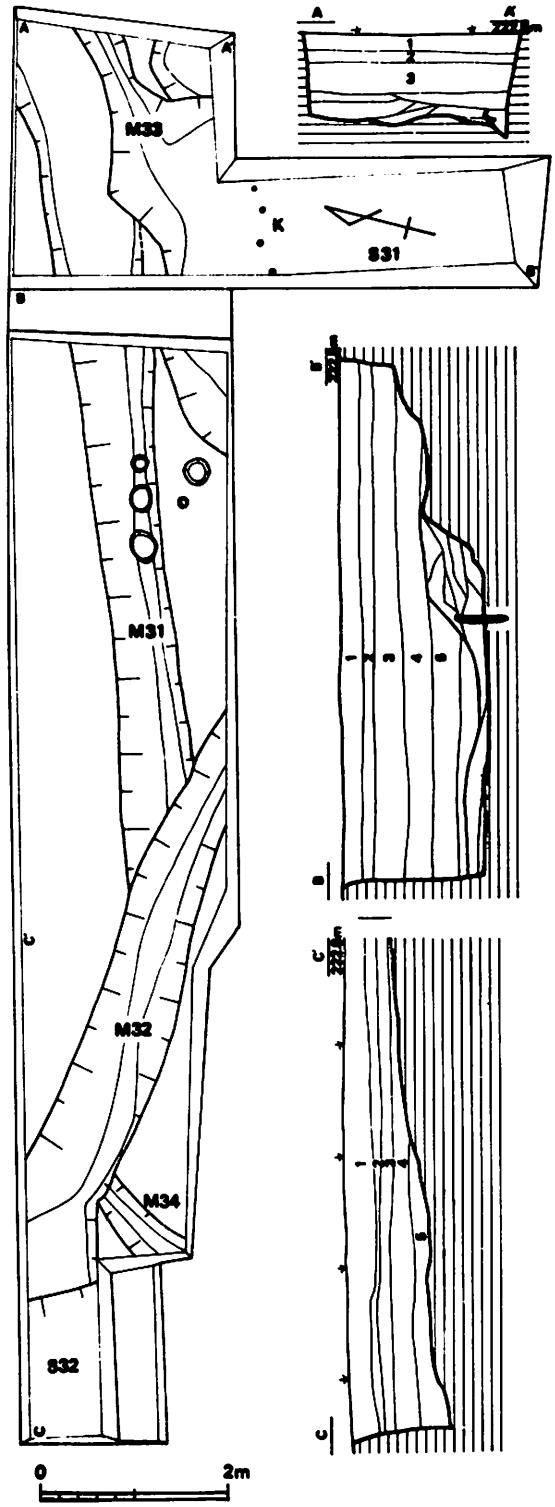


第5図　第2調査区遺構実測図

溜池状遺構はａ区のM22とｂ区のM23との間にあって，東西の長さ4.1～4.9cm，深さは床土の下から約20cmと浅く，溜池状遺構とするには躊躇されたが，砂質の青灰色土が堆積しており，第２調査区内遺構としてはやや古い時期と考えられた。なお，M24は出土遺物から中，近世頃とみられるほか，本調査区は全体に新しい時期のものが多い。

第３調査区の遺構（第６図）

この調査区で溝状遺構４，溜池状遺構２を確認した。溝のM31の幅は上端で約70cm，溝底で10～20cmを測り，西側はM32に切られたような状態を呈しているが土層による区別は困難でいづれも暗灰色砂質土が充満している。東側は土層観察用の土堤から東側では底面が広くなっており，A—A′の土層図にみられるように下層に黒褐色粘質土があるほか，杭列付近にかけてほぼ同一レベルで木片が多量に出土したが，これらの木片の大部分は自然木で流れてきて堆積した状態である。なお東側のこの底面は西側より約10cm高く，現表土下約90cmである。このように東側と西側ではやや異なっており改修



第６図　第３—ａ調査区遺構実測図

あるいはS31に分流していた可能性がある。遺物は4層が中世の包含層となっており，ピットが並ぶ付近では地山の削り面から5～6cm下った溝内上部から下駄が出土したほか木片などが出土した。

つぎにM32はM31の西にあって幅は上端で70～90cm，溝底で20cm前後を測る。深さはM31より約20cm深くS32に取りついている。M31との土層による新旧関係は不明瞭で確認することはできなかったが流下の方向が異なること，溝底面に差があることから時期的に若干違いがあるとみられる。なおこのM32はS31方向に向っているがその関係については未調査のため明らかではない。

M33はM31の西端が幅広くなっている部分の南側で確認したが，土層及び遺物出土状態からM33が古く，かつS31の杭列を伴なわない時期の古いS31に伴うことを確認した。このほかM34はM32がS32に取り付く付近にあってM32に直交している。M32及びS32との関係については明らかではない。

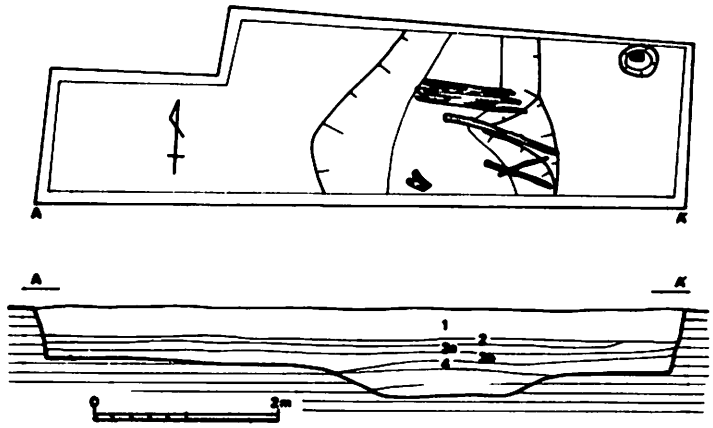
つぎに溜池状遺構のS31はその東北岸にM33が取り付いているが，その後堆積が進み，M33とS31の北岸が埋まったとみられる。すなわちS31の北岸と杭列とは約1.2m離れており，この間の土層の堆積はそれを示している。その後範囲を小さくして杭列から南を使用し後にこの部分も完全に埋まったようである。なおM31の東側はM33の代用として利用されたことも考えられる。またM32とS31との関係は未調査部分のため明らかではないが，M32は東にむかって下っていることからみてS31に流入していた時期があった可能性もある。

S32はM32の存在とともにS32の西端がb区内にみられず小トレンチ間にみられることから東西の長さは10m前後とみられS31とは別のものといえるが，第1調査区の溜池状遺構との関係については明らかではない。

第7調査区の遺構（第7，8図）

この調査区ではa区で南に下る溝状遺構と柱材を確認した。溝状遺構は上端の最大幅265cm，北側では145cm，南側で250cmを測り，溝底では北側で60cm，南側で約160cmと南に広くなって下る。深さは現地表から70～95cm，地山面から約30cmである。溝底から瓦が出土し，溝底から10cmほど高い位置から板材，自然木が出土した。この溝から東に約1m離れて，径33×40cm，地山面からの深さ60cmの掘り込みがある。

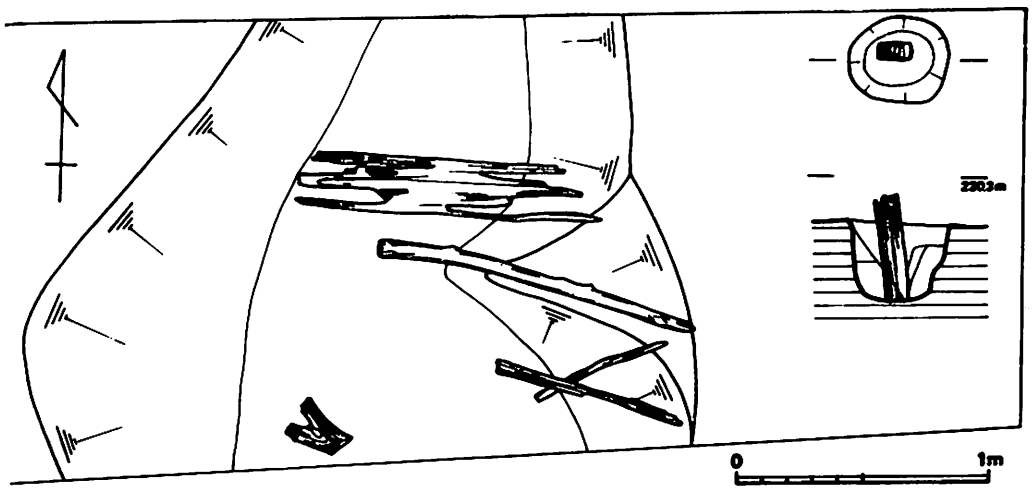
この溝は第7調査区北側に設定した第5調査区内では確認されていないことから，第7調査区内を北側の端としている可能性が強い。なお南側へは溝状遺構となるの



第 7 図　第7—a 調 査 区 遺 構 実 測 図

か，そのまま幅広くなっているのかは不明である。

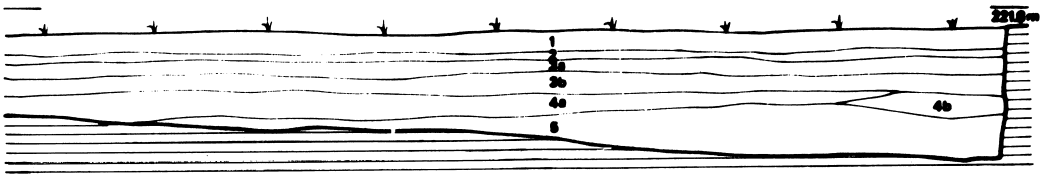
柱材は溝状遺構から東に約 1 *m*離れて，径33×40*cm*で地山からの深さ約60*cm*の掘り込みがあり，この中に柱材が存在したがトレンチ内には他になく，また溝状遺構との関係については調査範囲が狭いため詳細は不明である。



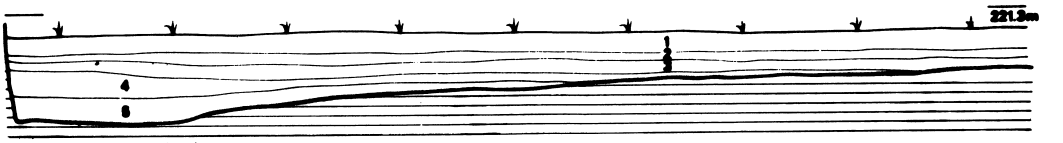
第 8 図　第 7 調査区遺物出土状態実測図

各調査区の遺物包含層（第 9 図）

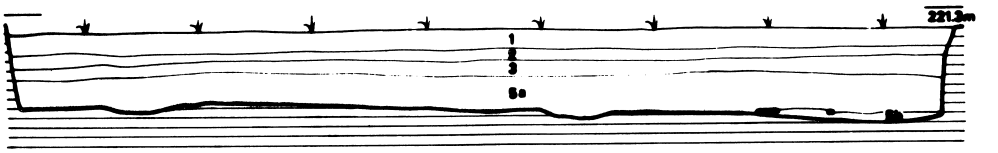
第 5，6，8，9 の各調査区からは溜池状の落込みを部分的に確認した。第 5 調査区は現地表から地山面までの深さは西端で80*cm*，東端で 140 *cm*と西にゆるやかに傾斜し，最下層には厚さ約50*cm*の黒みの強い暗灰褐色粘質土がある。第 6 調査区では a，



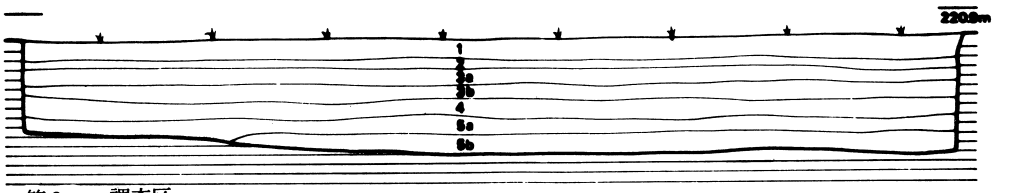
1：第5調査区



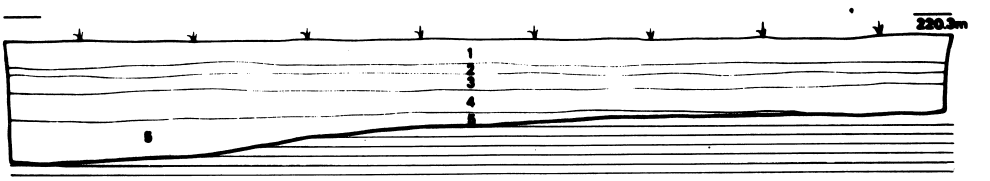
2：第6－a調査区



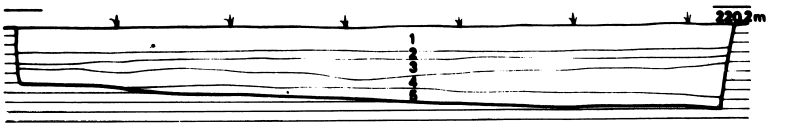
3：第6－b調査区



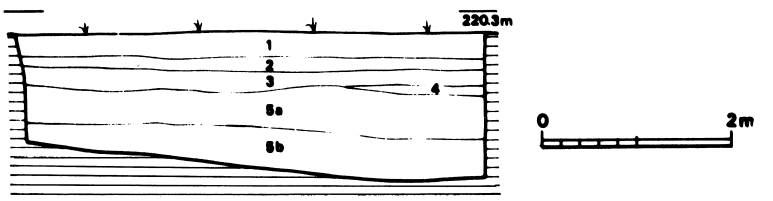
4：第8－a調査区



5：第9－a調査区



6：第9－b調査区



7：第9－1調査区

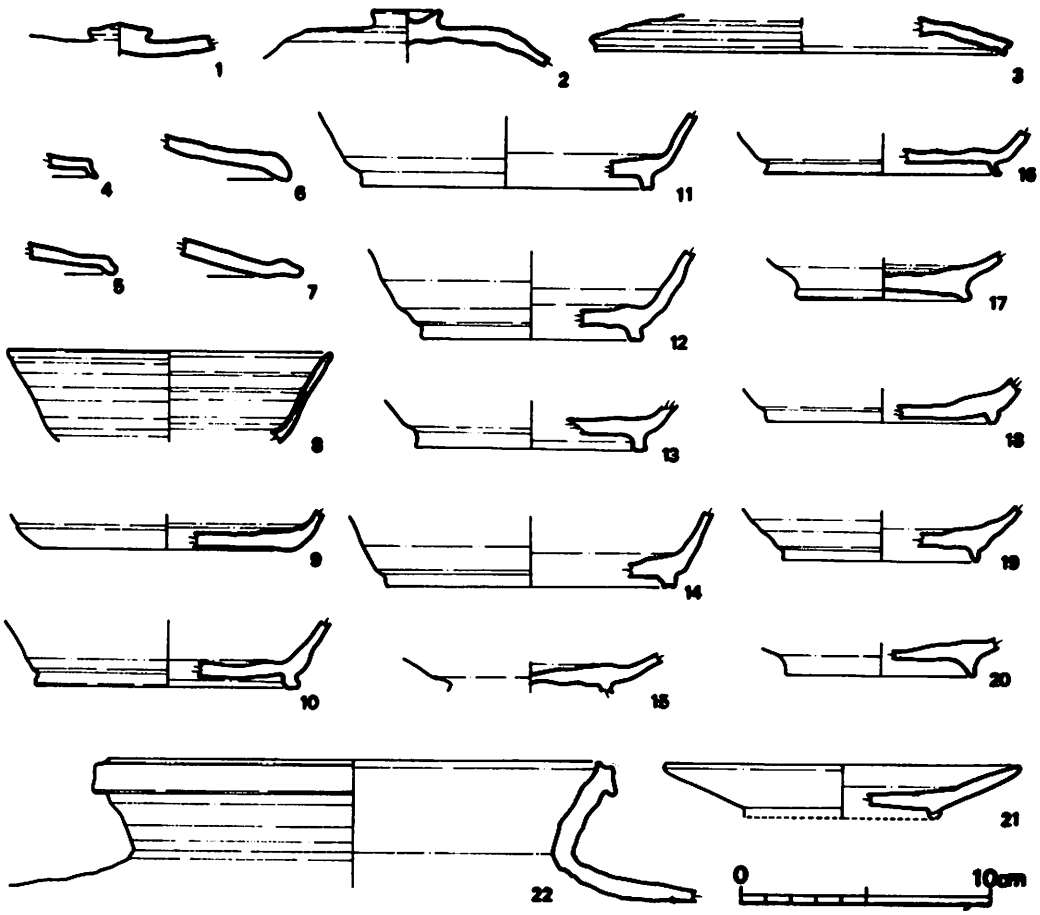
1　：耕　作　土
2　：暗黄褐色土（床土）
3　：暗褐色砂質土
3 a：暗灰褐色砂質土
3 b：灰色砂質土
3 c：暗灰色砂質土
3 d：暗褐色砂質土
4　：暗灰褐色粘質土
4 a：暗灰色粘質土
4 b：暗灰褐色粘質土
5　：黒　褐　色　土
5 a：暗　灰　色　土
5 b：黒　色　砂　層

第 9 図　各調査区北壁断面実測図

bの両区で確認したが，a区では地山面までの深さは東端で45㎝西端で95㎝と西に下っており最下層には黒褐色土の5層が堆積し遺物包含層となっている。b区では現地表から地山面までの深さは東端で95㎝，西端で75㎝と東にゆるやかに傾斜をみせるが，南側はこれよりもやや強く傾斜をみせる。5a層はやや黒みの強い暗灰色土で第5調査区，第9調査区などの5層に相当しており，厚さ35～45㎝で木片，須恵器，瓦片などが多く出土した。なおこの調査区5b層は黒色砂層で第9調査区の5層の下の砂層に相当する。第8調査区のb区は耕作土の下は薄い床土からすぐに地表となっているがa区では現地表から地山面まで西端で95㎝，東端で125㎝とほとんど平坦にゆるやかに東に下っている。最下層の5層には厚さ約20㎝の黒褐色粘質土が堆積している。第9調査区では，a，b区間とe区にこの黒褐色土の5層がみられる。地山面はa区の東端では現地表から約80㎝で次第に西に下って，a区西端では130㎝の深さとなり，最下層の5層の厚さは45㎝を測る。そしてb区東端では地山面は現地表下約90㎝となり5層の厚さ10～15㎝と薄くなる。d区西端の地表面は現地表下60㎝と次第に上っており，4，5層は他の調査区と同様に包含層である。e区では東端での地山面は花崗岩のバイラン土とみられる砂層で，現地表下約180㎝を測り，5a層の厚さは約60㎝，5b層が40㎝と厚い堆積がみられる。約22㎞西に設定したf区では5層はみられず，地山面は西に傾斜している。このことからf区はa，b区の地山及び5層の黒褐色土と同様な状態を呈するものとみられ，第5，6，8，9区の落込みは溜池状遺構とするにはその立上りが弱く，また，各調査区内にはこの4，5層の包含層がみられず，すぐ地山となっている部分もあり，本年度調査地点の南側の地形はかなり凹凸面のある地形をなしていたようである。

Ⅳ 出 土 遺 物

各調査区から出土した遺物は国分寺瓦のほか，土器では須恵器が大部分を占めているが，このほか，土師質土器，瓦器，瓦質土器，緑釉陶器，灰釉陶器，須恵質土器，亀山焼，備前焼，常滑焼，瀬戸焼，伊万里焼，中国製の青磁，白磁などが少量づつ出土している。木製品では櫛，下駄，曲物の底板，柱材，杭，木札状木製品，板状木製品，筒形木製品，棒状木製品のほか加工木の小片，焼けこげのある木片，自然木などがある。このほか土製品では冥銭，石製品では砥石がある。なお，今回出土の瓦類の大部分は小片で，縄目の叩き目，布目のつくものが大部分で他に無文のものが少量あり，軒丸，軒平瓦の出土はない。



第10図　須　恵　器　実　測　図

須　恵　器（第10図１～22）

坏類が大部分でそのほか皿，壺，甕類が少量出土している。

坏蓋（１～７）（１）の天井部は平坦で，扁平な宝珠形のつまみをつけている。（２）の天井部も平坦で，凹状のつまみをつけている。（３）は全体的に扁平で，復元径13.5*cm*を測り，端部は内傾ぎみに短く下り，沈線を入れて明瞭な稜をとる。（４）は端部を下方に短く屈曲させて明瞭な稜をとる。（５）は端部が丸みをもち，下方に曲げて沈線を入れている。（６）はマキアゲ，ミズビキ痕を残し，端部はややふくらみをもつ。（７）の口縁端部もややふくらみをもち外方にひらく。

坏身（８～14，16～20），平底と高台付の２種類がある。後者はさらに椀形になるとみられるものがあるが口縁部が欠損のため明瞭ではない。なお（10～14，16）のように底部から体部へは角度をかえて外上方にまっすぐに立上るものと，（17～20）のように内湾しつつ立上るものとがある。

（８）は底部を欠損しているが器厚が薄く，体部は外上方にほぼまっすぐに立上り，端部は丸くおさめている。（９）はマキアゲ痕を残し，体部に横ナデを施すほか，仕上ナデがある。（10）は底部をヘラ削り，仕上ナデをおこない，太く厚みのあるよく整った高台が底部端につく。また底部は墨溜として利用されている。（11）の高台は断面台形をなしてよく整い，胎土，焼成は精選堅緻である。（12）の底部内面は凹面を呈し，高台部の断面は（12）に似る。（13）の高台の断面は台形を呈するが貼り付け面が広くなりやや雑となっている。（14）は底部から体部へは稜をとり明瞭に区別され，高台の断面は台形を呈する。焼成はやや不良である。（15）の底部内面は凹面を呈し，外面に仕上ナデがみられる。高台は細く外方にひらく。（17）は底部のヘラ削りがやや厚く，その外方に粘土紐を貼り横ナデによりおさえている。（18）の底部内面は凹面を呈し，高台は粘土紐をそのまま貼り付け，オサエ，ナデをおこなっていない。胎土に砂粒が多く全体に雑である。（19）の底部外面の仕上げは雑で，体部にマキアゲ，ミズビキ痕を残し，高台は断面三角形を呈し端部はとがりぎみである。（20）の高台も断面三角形を呈し，焼成はやや甘い。

皿（15）　高台は薄く外方にひらき，底部は墨溜に利用している。（21）は口径推定14.3*cm*，器高2.1*cm*，端部は丸く，底部はヘラ削りで，高台基部はナデによる。

壺（22）　口縁部はくの字形に外反し，端部に凹線が入るほか，下方に折返して稜をとる。なお体部内面には叩き目が残る。

土師質土器（第11図23～50）

器形としては小皿，皿，椀，甕，鉢，釜，鍋があるが，小皿，鍋の種類が多い。

小皿（23，24）　ともに口径約7.0㎝，器高1.2㎝を測り，他のいくつかもほぼ同じである。底部は糸切底で，内外ともナデ調整を施す。

皿（25）　やや大型の皿で底部は糸切底，内外ともナデ調整を施すが焼成は軟弱。

椀（26）　高台部は厚みがあり，粘土紐をマキアゲて底部に貼りつけているが底部は3㎜と薄い，焼成は良好である。

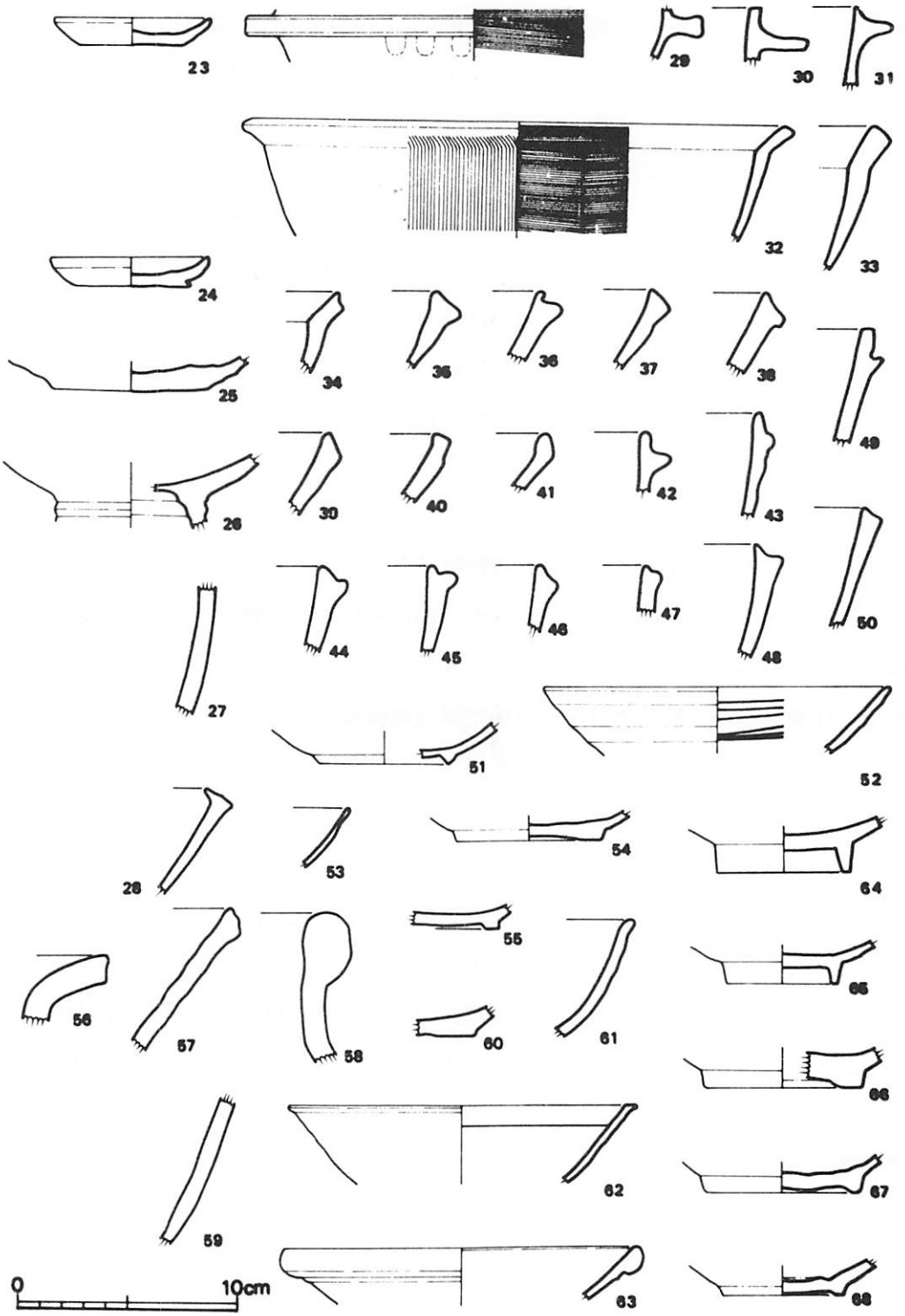
甕（26）　内面に横方向のハケ，外面は格子目の叩き目により調整しており，焼成は良好，色調は橙褐色を呈する。

鉢（28，35～40）　鉢には摺鉢（28，35～37）とねり鉢があるが，（38，39）は小片のため，そのどちらであるのか明らかではない。

（28）の口縁部は平坦で，端部は内側にくの字状に曲ってとがる。内面はハケ調整後4条の沈線を単位として施し，外面は指によるオサエ調整である。（35）の口縁部は肥厚して平坦となり内外に張出している。内外面ともハケ調整による。（36）の口縁部はやや肥厚して外方に張出すとともに，内側端部は短く立上っている。内面には横方向のハケ調整後，3本～4本単位とみられる沈線が入っている。（37）の口縁部は次第に肥厚して平坦とし，内面には横方向のハケ調整後に沈線を施すが単位は不明。外面は指によるオサエ調整である。（38）は口縁端部をつまみ出して断面は三角形を呈して余分が外下方に張出している。（39）の口縁部も断面は三角形を呈するがナデ調整により整え，端部は内側に小さな面をとり，焼成は良好である。（40）は片口鉢で内面の調整はハケ，外面はナデによる。

釜（29～30）　煮沸用土器のうち釜の出土は少ない。（29）は口縁部，底部とも欠損しているが口径21㎝前後とみられやや内傾しており，つばは厚く安定感がある。内面は横方向のハケ調整，外面のつば上部はナデ調整，下部には指によるオサエ調整がみられる。（30）の口縁部の立上りは短く，端部は平坦で，つばは薄く広い。焼成はやや不良であるがナデ調整がみられる。（31）の口縁部は短くとがり，つばも短くなる。（42）の鍋を考慮すると（31）は鍋の可能性が強い。

鍋（42～50）　鍋類の口縁部は多様であるが大別すると，a類――口縁部と体部が区別される稜を内側にもって口縁部が外反するもの（32～34），b類――口縁部の外側に凸帯をめぐらすもの（42～45，49），c類――口縁部近くに凸帯はなく，口縁部


23
29
30
31
32
33
24
34
35
36
37
38
49
25
26
30
40
41
42
43
44
45
46
47
48
50
27
51
52
28
53
54
64
55
56
57
58
60
61
65
66
59
62
67
63
68
0
10cm

第 11 図　土　器　実　測　図

肥厚のみや，口縁部の整形により外方に張出したもの（46～48，50）に分けられる。

a類　（32）は口縁部が肥厚しないで外反し，内面は全面ハケ調整，外面は体部がハケ調整，口縁部はナデによる。（33）の口縁部はしだいに肥厚し，外反は弱い。内面は全面ハケ調整，外面は体部がカキ目，口縁部は部分的に斜方向のカキ目調整を施す。（34）は（32）と同様に口縁部は肥厚しないで外反し，端部は浅い凹状を呈する。内面の体部はハケ調整，口縁部はナデ調整，外面はナデ調整をおこなう。

b類　（42）は（31）のつばよりやや短いが太めの凸帯を貼り付け，仕上げは丁寧である。（43）では凸帯が低く，（44）は全体に厚みのある土器で断面台形に近い太い凸帯を口縁部近くに貼り付けている。（45）は丸みのある凸帯を口縁端部近くに貼りつけている。（49）は口縁端部が平坦で，口縁部のやや下方に粘土紐を貼りつけ，器面は全体に雑な仕上げである。

c類　（46）は口縁部をしぼり端部を丸くおさめ，外方にはつまみ出して凸状にしている。（47）の口縁端部は丸くおさめ凹線が入る。（48）は口縁部をしだいに肥厚させて端部はとがり，外方は張出している。器面の仕上げは雑である。（50）の口縁部はしだいに厚みをもたせ，端部を平坦にしている。

瓦器，須恵質土器，緑釉陶器，その他の国産陶磁器

瓦器（51～53）　（51）の埦底部は断面三角形の貼付高台で，（52）は復元径15.5㎝内面はヘラミガキの暗文を施し，外面はやや雑な仕上げで，（53）は器厚が薄く，仕上げが丁寧である。

瓦質土器（41）　鉢で口縁部はまっすぐ立上り端部は丸く仕上げている。口縁部外面を黒色にして，他の部分は青灰色を呈する。

緑釉陶器（54，55）　（55）は削出し高台の埦で，胎土色調は赤褐色，内外面は黒灰色を呈し，（55）は断面台形を呈し，胎土色調は白灰色，内外面は淡緑黄色を呈する。他に焼成のややあまいものが1片出土している。

亀山焼（56）　大きく外反する大甕の口縁部で，胎土に砂粒が多いが焼成は良好で色調は黒青色を呈する。

須恵質土器（57）　こね鉢で口縁部は丸みをもち，ミズビキ痕が著しく色調は青灰色を呈する。他に口縁付近でやや内傾するものがある。産地不明である。

備前焼（58）　玉縁が発達した大甕の口縁でやや新しい時期であろう。

常滑焼（59）　大甕の一部で格子目の叩きが付く，なお体上部の破片には自然釉が

広くかかっているものがある。

その他高台付の灰釉陶器，黄瀬戸の埦，伊万里焼の埦などの破片がある。

中国製磁器（60～68）

青磁（60，61）　（60）はいわゆる蛇目高台で，削出しによる低く幅の広い台部である。（61）は鎬のない幅の広い蓮弁文を施している。このほか幅のごく狭いものが１点出土している。

白磁（62～67）　越州窯の白磁で（62）の口縁端部は外方に小さく張出す。器面内側に沈線が入り，外面下方には釉はかからない。他に口縁部がやや丸みをもつものがある。（63）は口縁部がふくらみ，下方をヘラ状工具でおさえている。（64～67）はいづれも削出し高台である。（64）は台部が高く，全体にシャープであるが，体部下半から台部へは釉がかからない。（65）は台部が若干低く，釉は台部もかかる。（66）の底部，高台部とも厚く，見込みの仕上げもやや雑である。（67）の高台もシャープさがなく，体部下半には釉がかからない。

（68）は削出し高台で台部は低く，釉はこの部分までかかる。見込みはやや雑な仕上げである。窯，時期は不詳。なおこのほか青白磁の合子片が出土している。

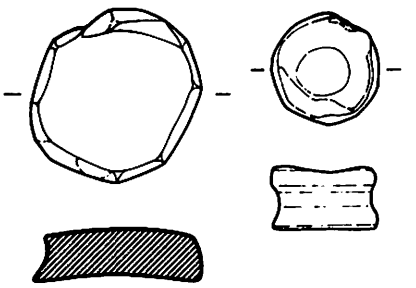
土製品（第12図）

（１）は国分寺瓦を利用のもので径6.3×6.7㎝，厚さ1.8㎝の冥銭である。（２）は径約4.3㎝，高2.2～2.5㎝の土師質の滑車状を呈する土製品であるが用途は不明。

木製品（第13図）

木札状木製品（１～４）　（１）は長さ8.7㎝，（２）は長さ10.6㎝，（３）は現長10.6㎝の断面は楕円形を呈し，孔のあく部分は削られて全体は鐸舌状を呈する。（４）は長さ14.6㎝，幅3.5㎝の板状の中央部に孔がある。（５）も木札状を呈するが孔がなく，別の用途も考えられる。現長15.4㎝，幅3.8㎝，厚さ0.8㎝を測る。

櫛（６）　棟幅は５㎜，歯の長さは3.4㎝，歯の付根部分は両側から斜めに削っている。全体の形状は残片のため不明であるが一方の面がやや内湾をみせる。

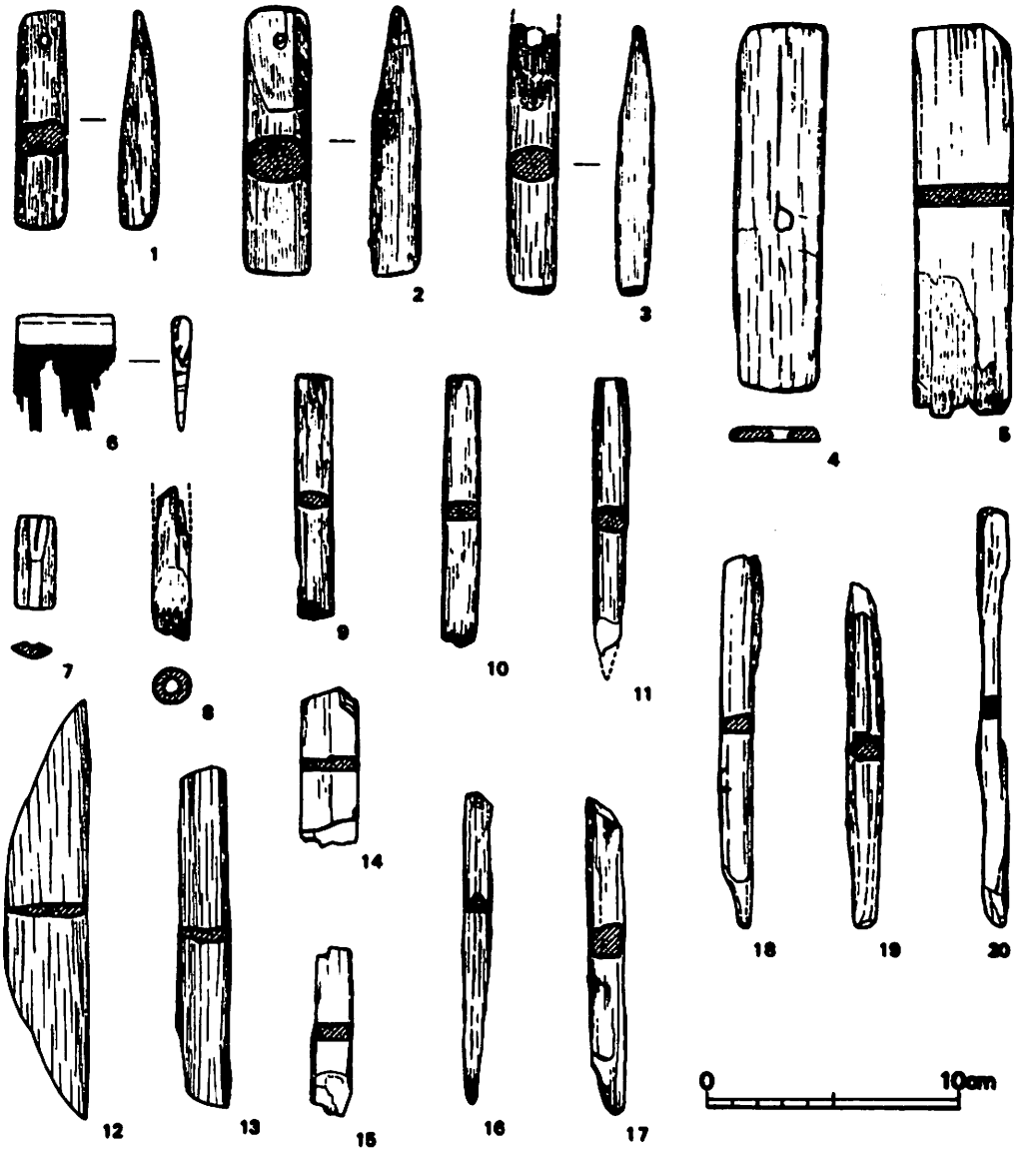


第12図　土製品実測図

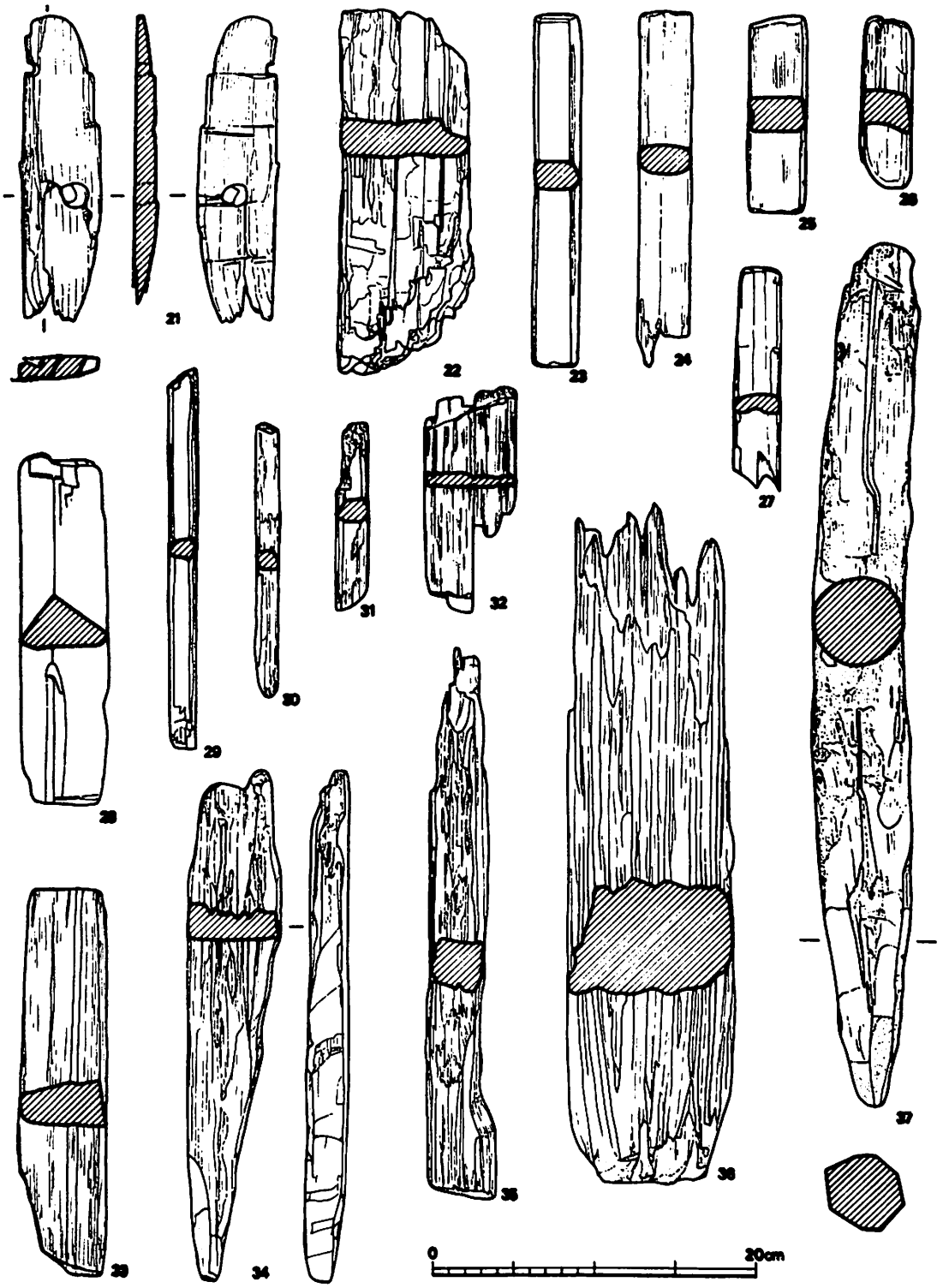
筒状木製品（7，8）　（7）は径1.6cmで端部はやや広がる。（8）は径1.4cm，孔は6mmを測り焼こげの部分がある。

箆状木製品（9～11）　（9）は現長9.7cm，幅1.5cmで断面は楕円形を呈する。（10）は現長10.2cm，幅1.4cmで断面長方形を呈する。（11）は現長11cm，幅1.4cmで端部は箆状にとがり断面は楕円形を呈する。

曲物の底板（12，13，21）　（12）は厚さ0.5cmで弧を描くことから曲物の底板と



第13図　木製品実測図 (1)



第14図　木製品実測図 (2)

みられる。（13）も両端が弧を呈しており，（22）の現長22.4cm，厚さ2.2cmを呈して同様に底板とみられる。なお現存部分のうち半分は焼こげている。また（32）は板状木製品の断片であるが底板の可能性がある。

棒状木製品（23～27，29～31）　（23）は長さ22cmの断面台形状を呈し，（24）は現長22.2cm，断面楕円形を呈する。（25）は長さ12.3cm，断面長方形状を呈している。（26）は現長10.5cmで断面は台形状を呈する。（27）は現長13.8cm，もとの断面形は（24）のような楕円形とみられる。（29）は現長23.5cmで，（29～31）はいづれも（23～27）とは大きさ，形状が異なることから用途が異なる木製品とみられる。

用途不明木製品（28，33）　（28）は長さ21.7cm，両端を切って断面が三角形状を呈し，（33）は長さ24cm，幅5.5cm，厚さ1.8～2.8cmで両端を切っている。

杭及び柱材（34～37）　（34）は第2調査区のK33で現長31.7cm，幅5.7cm，厚さ2.5cmの板状のものを一方はかなり上から削り落し，他方は先端付近から削りとがらせている。（35）は同調査区のK34で現長34cm，幅，厚さは3.2×3cmを測るが，下端から5.5cm付近で辺を広くしており，端部は平坦である。（36）は第7調査区の柱材で現長42cm，幅，厚さは10×7cmを測り，下端部は平坦である。（37）は現長53.5cm，径5～6cmの広葉樹の自然木の端部のみを加工している。

木片（14～20）　（14，15）は柾目材で，（16）は端部がとがる。（18～20）は端部に加工がみられるほか焼こげがあり，この種のものが比較的多く出土している。

板材（38）　現長121cm，幅21cm，厚さ約4cmを測る。

第15図　木製品実測図（3）

V まとめ

安芸国分尼寺跡伝承地の第1次発掘調査で，第9，10調査区とした地点において基壇状遺構，築地溝とみられる遺構を確認したほか，多数の遺物が集中的に出土し，国分寺跡から1町ないし1町半の距離にあって，地形的にも「にんじ堂」付近より有望とみられたことから，本年度はこの西側部分で国分寺跡との間を調査地とした。この結果第4調査区を除く，各調査区で国分寺期の瓦，須恵器及び木製品などが出土したが，中心部の建物跡や築地跡など寺跡に伴うとみられる遺構はすでに記してきたように確認できなかった。しかしこの一帯は国分寺跡の隣地として長期間利用されたとみられる。すなわち調査地北側の第1，3調査区の溜池状遺構，溝状遺構上の土層のうち4層は中世の遺物を含み，遺構内は未調査部分が多いが現状では含まれなくなるので遺溝の使用と放棄はそれ以前とみられ，第1調査区の溜池状遺構々底出土の遺物や他の調査区の遺物出土状態を考慮すると少なくとも平安時代にはこれらの遺構が使用されていたと考えられ，その後も各所に作られて土地利用があったといえよう。

つぎに南側の第5，6，8，9調査区ではいづれも皿状の窪地が各所に存在し，4層と5層が遺物包含層であるがこのような窪地が各所に存在する調査地南側の状態は用地として不向きであり，建物遺構は全く確認できなかった。また，第7調査区の溝状遺構はその北側の第5調査区の土層断面図にあらわれないこと，遺構確認面からの掘り込み面が浅いことなどから，この溝は第5調査区と第7調査区との間付近から掘り込まれている可能性が強いが，当初から湧水あるいは排水に関係して掘られたものか，築地溝として寺跡に関係するものであるのかについては調査範囲が狭く明らかではない。なおこの溝内から比較的大きな板材や自然木が溝に直交して出土したが，溝は浅く，前述のように溝のはじまりが比較的近い場所であり流れてきたとは考え難く，投棄したものであろう。また，この溝から東に約1m離れて存在した柱材は穴を掘って建てており掘立柱とも，柱材を利用した杭とも考えられるが調査範囲が狭く，溝との関係についても明確にすることができなかったので今後の検討によりたい。

つぎに遺物は国分寺期の瓦のほか奈良末～平安時代とみられる須恵器が大部分を占めているが，瓦類はすべて小片であり，この瓦類の出土状態からみて今回の調査区には寺跡に直接関係する建物跡が存在した可能性は少ないといえよう。なお調査区南側では須恵器が多く，古代，中世の陶磁器，土師質土器類は北側から主に出土している。

これらは量的には少ないが種類としては緑釉陶器，灰釉陶器，瓦器，瓦質土器，須恵質土器，亀山焼，備前焼，常滑焼，瀬戸焼，青磁，白磁など多種であり，特に煮沸用の土師質土器は細部に変化が認められるなど良好な資料を得た。

ところで小字尼寺とよばれている一帯は文政2年の吉行村の国郡志御用書上帖には尼寺の小字はなく，別項に「露掛ニ有り」として「當時は纔ニ九尺四方之堂也」との記載がみえるほか，吉行村の天正年間の水帖（坂井谷水番組）[①]は明治34年に書き写されたもので，「……尼堂道限り」との一文が付けられているが尼堂，尼寺の小字名の記載はない。また江戸末期の芸藩通志の図には小堂らしきものが描かれ，傍に尼寺と書かれているが小字名はない。これらの文献にみられるように明治以前にあっては，小字尼寺は伽藍のように所在を示すのではなく，むしろ国分寺と関連して尼寺が存在すると解釈されて，すでに戦国～江戸期に小字露掛の地に存在していた小堂を尼堂，尼寺としてこれにあてて伝承してきたようである。なお，吉行村の水帖（坂井谷水番組）芸藩通志による伽藍の地は国分寺跡の東側寺域より西側で現在指定地としている地域にあたる。今回の調査地は吉行村の水帖の納力，国郡志御用書上帖ののうりきであり，この地は早くから国分寺跡の寺域外として区別し認識されていたようである。

以上のように今年度の発掘調査は，国分尼寺跡としての有力な手がかりを得るものではなかったが，昨年度の第9調査区と，今年度の第7調査区との間にある未成氏宅の下には地形をおこなったときに礎石らしき大きな石が存在したとのことである。仮に昨年度の第9調査区の基壇状遺構が寺跡に伴い第10調査区の溝状遺構を東側の築地溝であると想定し，今回調査の第7調査区の溝も築地溝として寺跡の関係あるものと考えると，その間に建物が存在した可能性はなお捨て去ることはできない。なお，国分寺跡の指定地東端から約300 mの変電所建設の際に須恵器壺が出土しており，この付近には別の奈良～平安期の遺構が存在していることも考えられる。いずれにしても次年度以降は，本地域一帯について調査をさらに進めることにより寺域等の確認をおこなってゆきたい。

① 岡田亀雄氏蔵，同御教示による。

図　　版

a 安芸国分尼寺伝承地付近々景（西より）

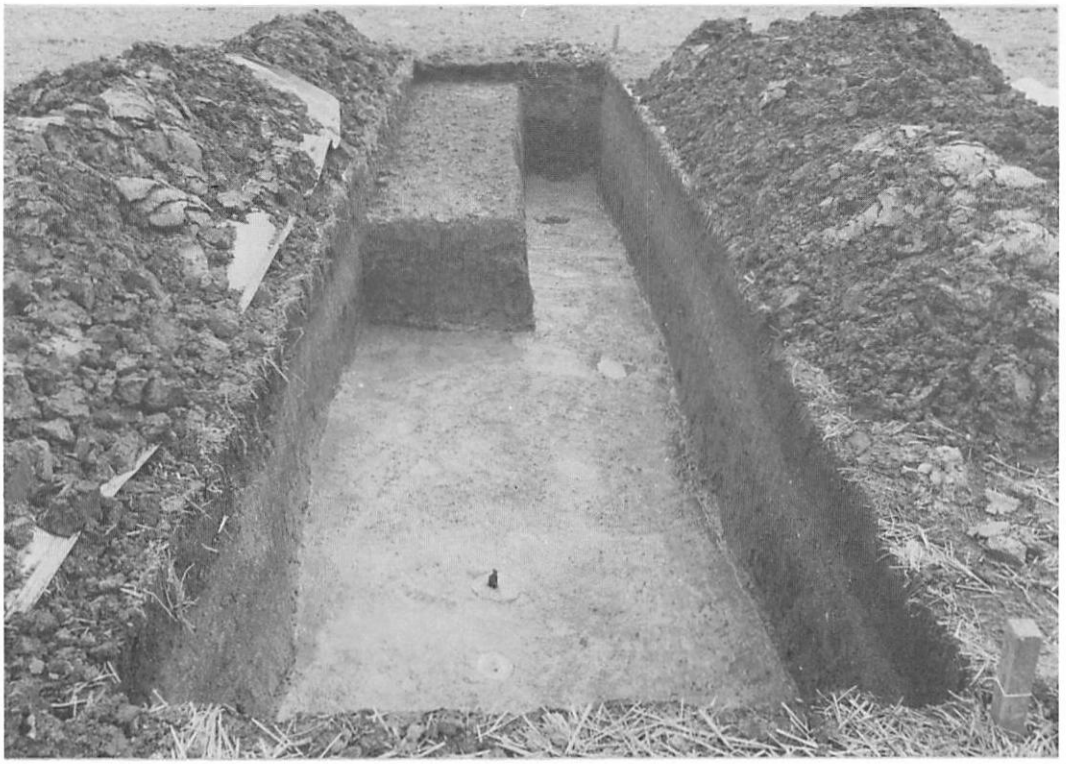
b 第１調査区全景（西より）

a 第1－*a*調査区遺構（東より）

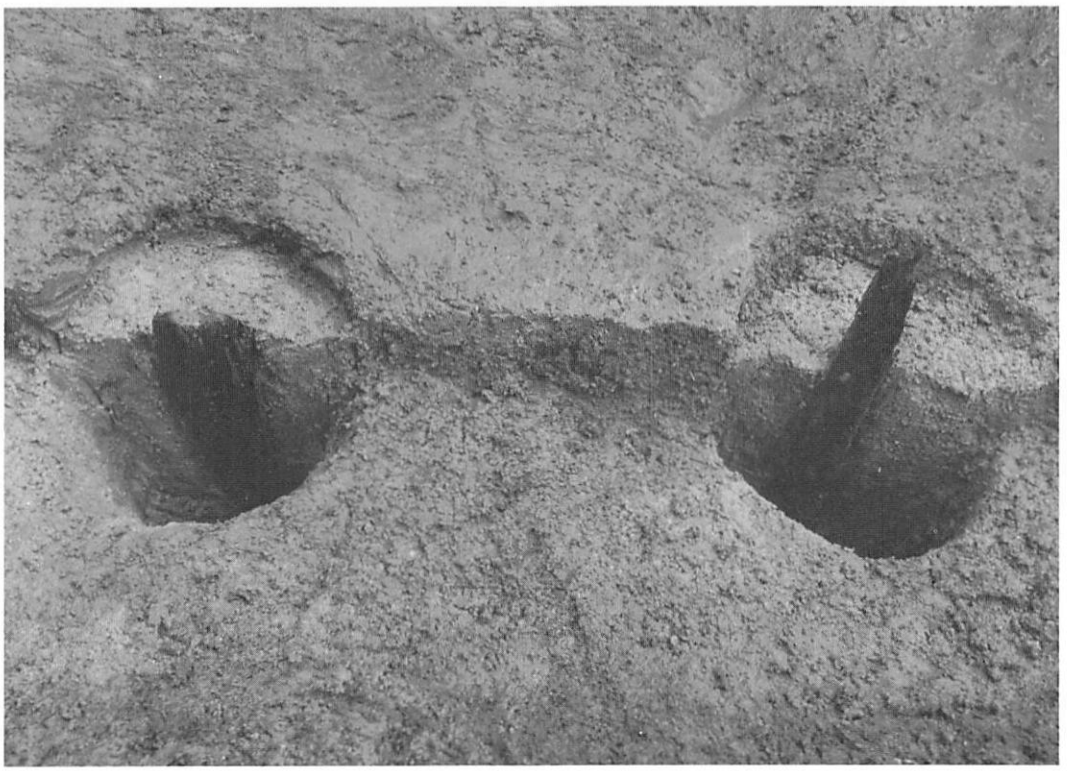
b 同　　上（東より）

a 第2－*a*調査区遺構（東より）

b 第2－*b*調査区遺構（西より）

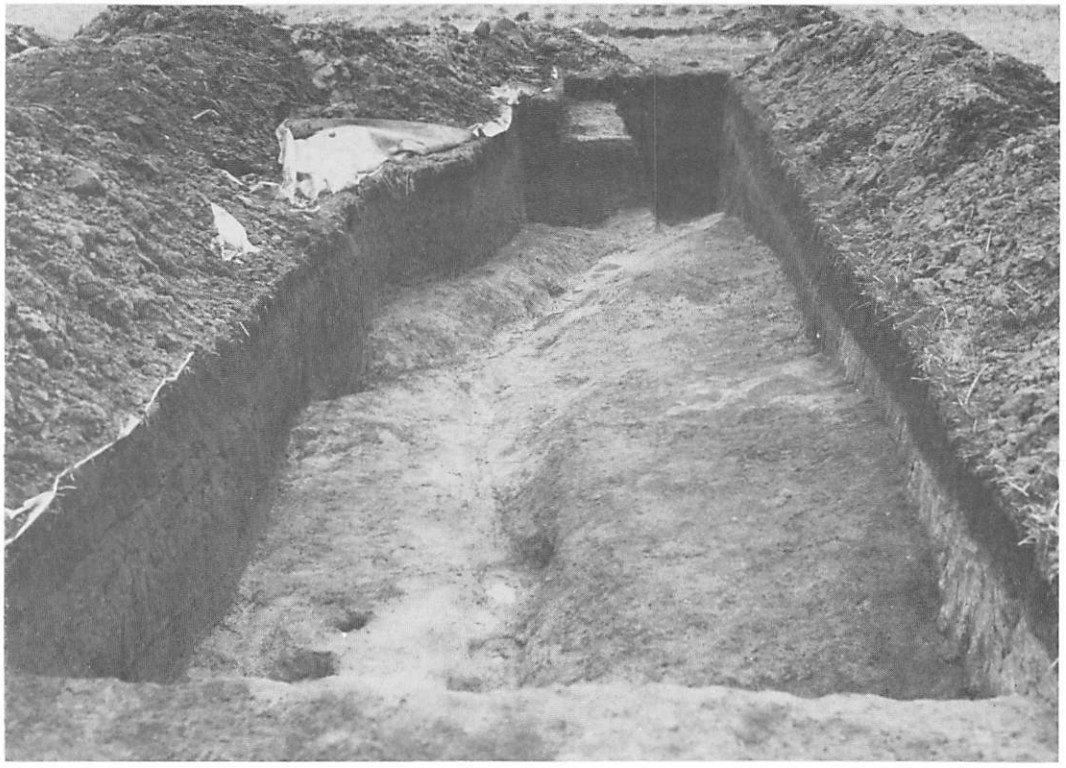


a 第2－*d*調査区遺構（北より）

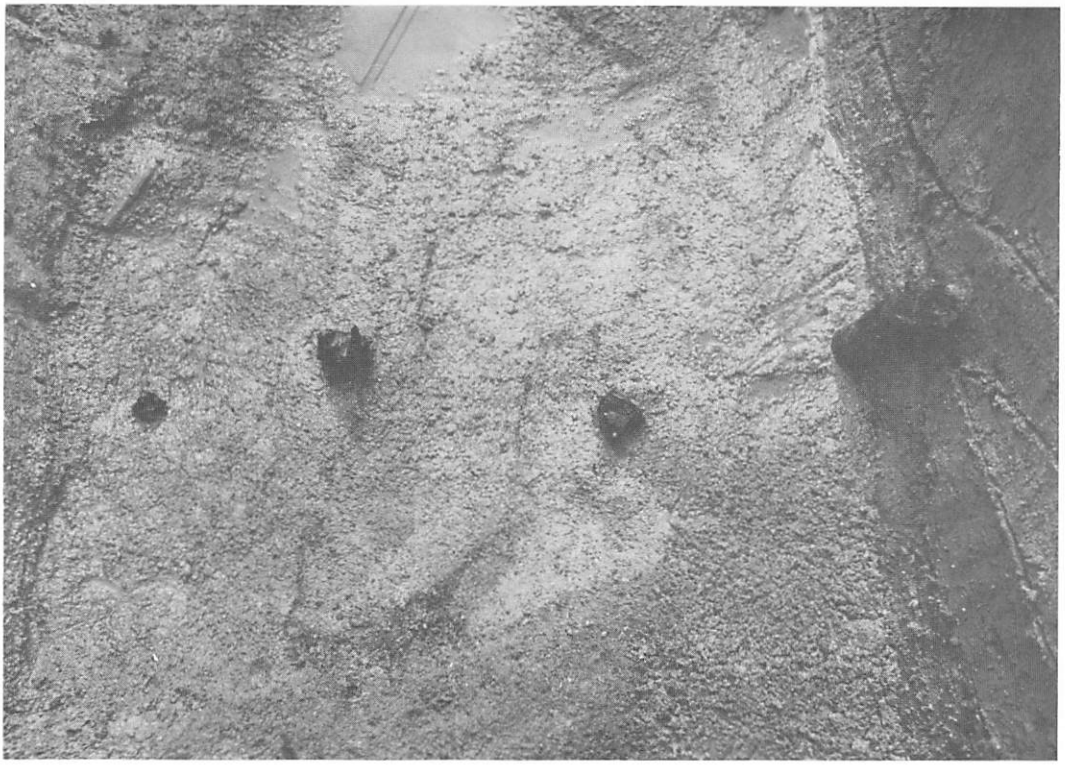


b 同　　上　杭出土状態（西より）

a 第3－*a*調査区遺構（北より）

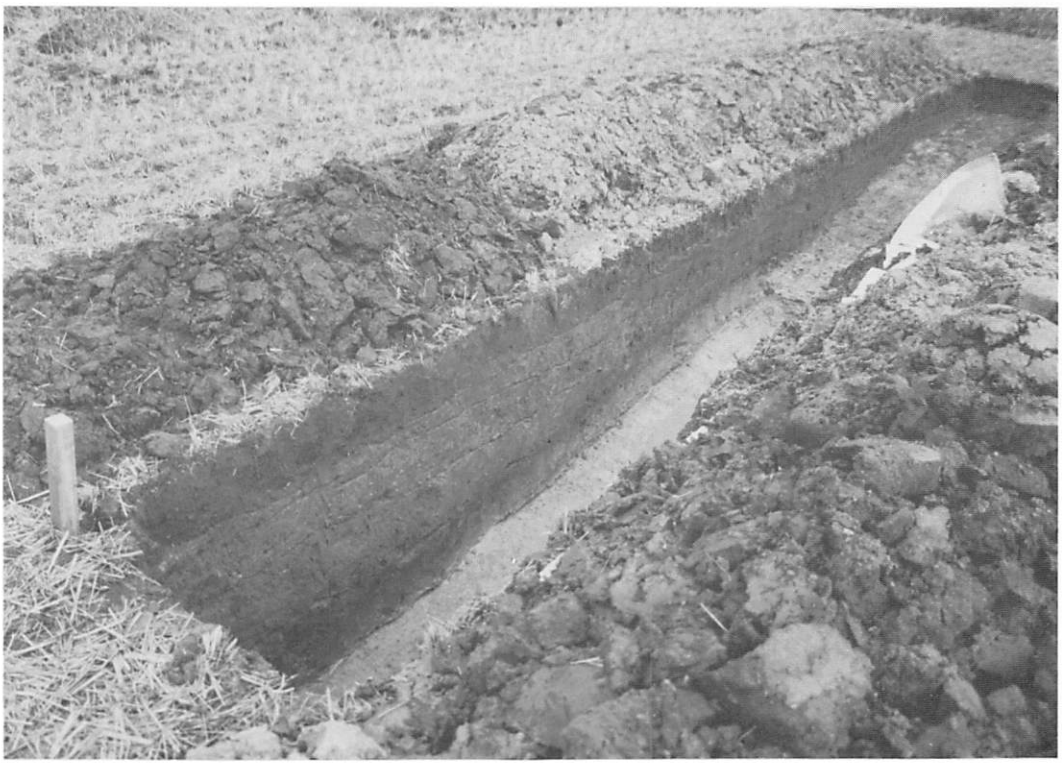


b 同　　上（東より）



a 第3－*a*調査区杭列（北より）

b 同　　上　杭出土状態（東より）



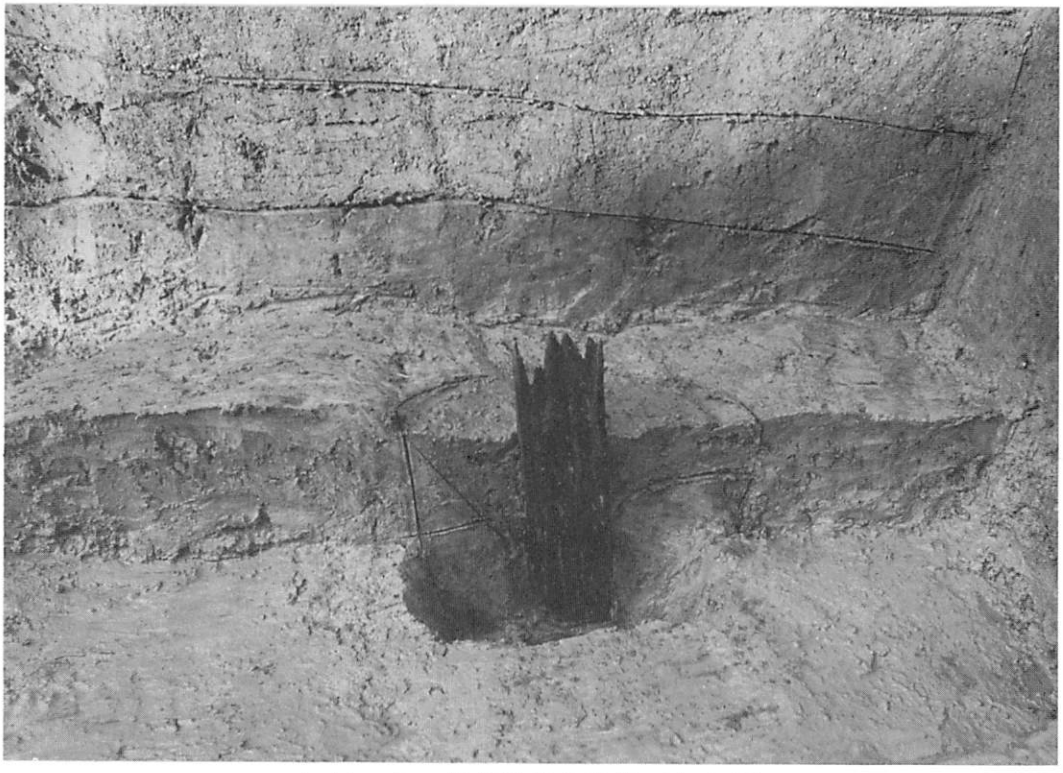
a 第6－*a*調査区（西より）

b 第6－*b*調査区（東より）

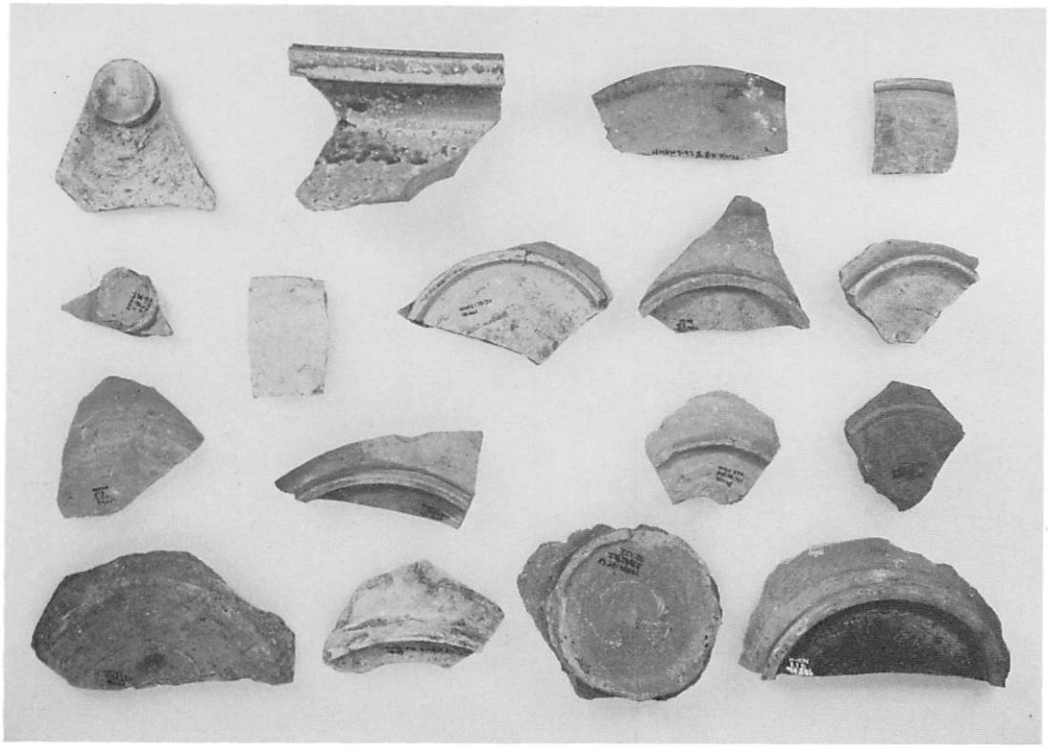
a 第7－*a*調査区遺物出土状態（西より）

b 同　　上（南より）

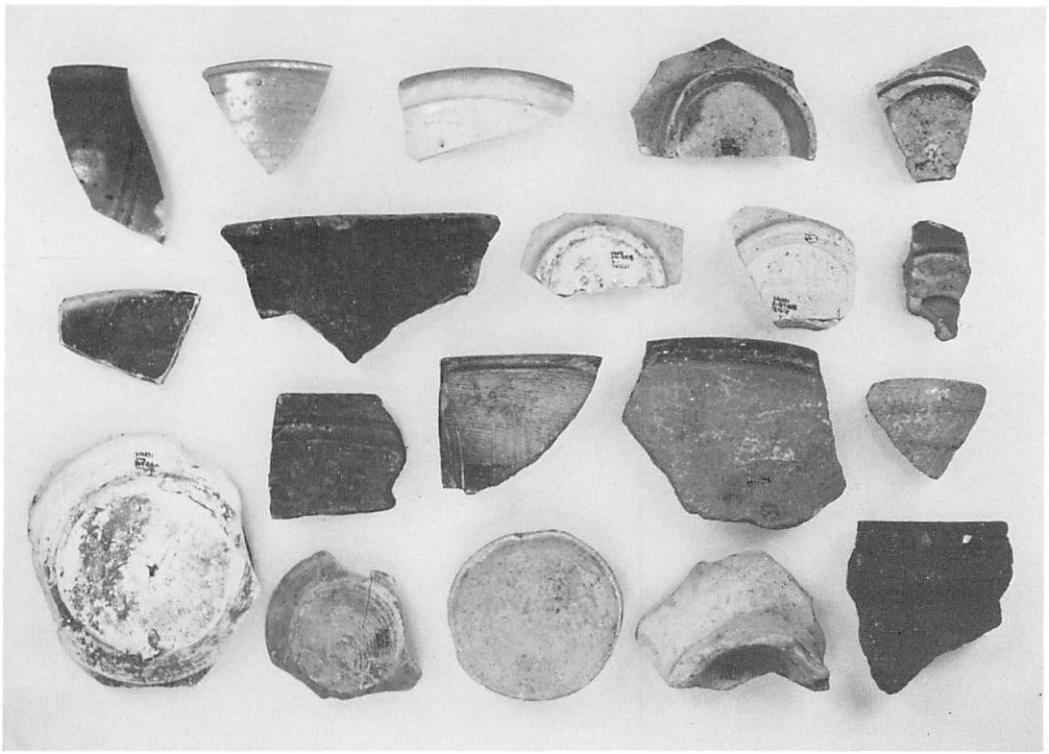
a 第7－*a*調査区溝状遺構（北より）



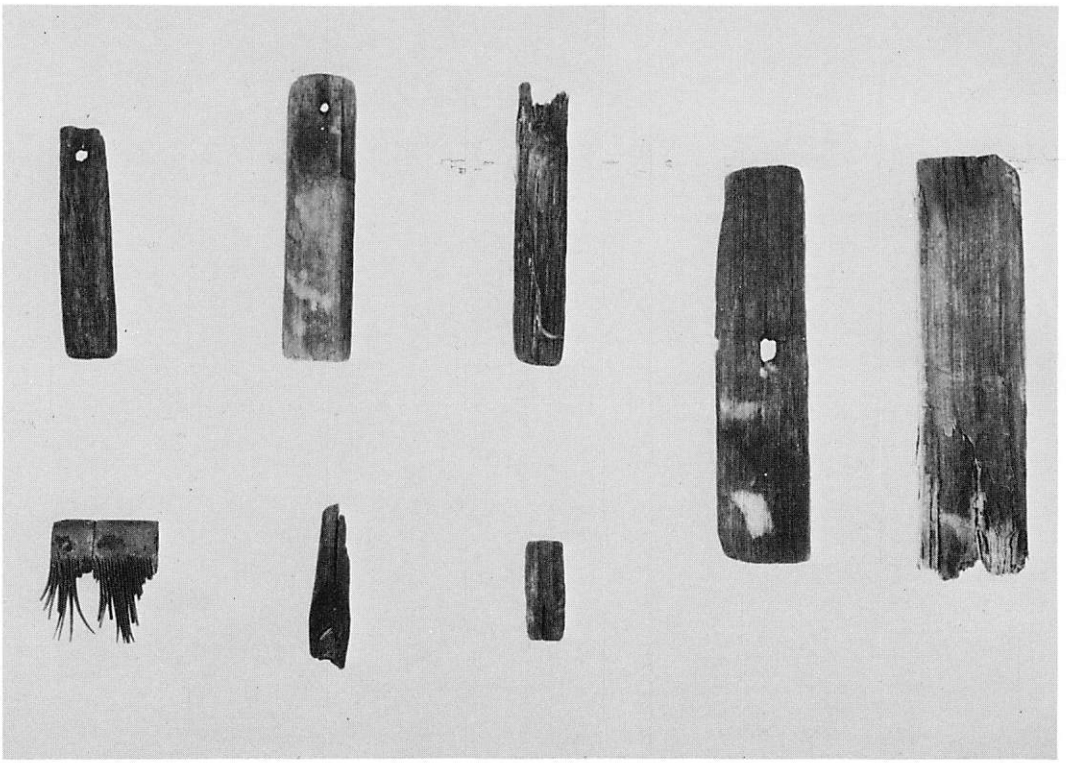
b 同　上　堀立柱検出状態（南より）



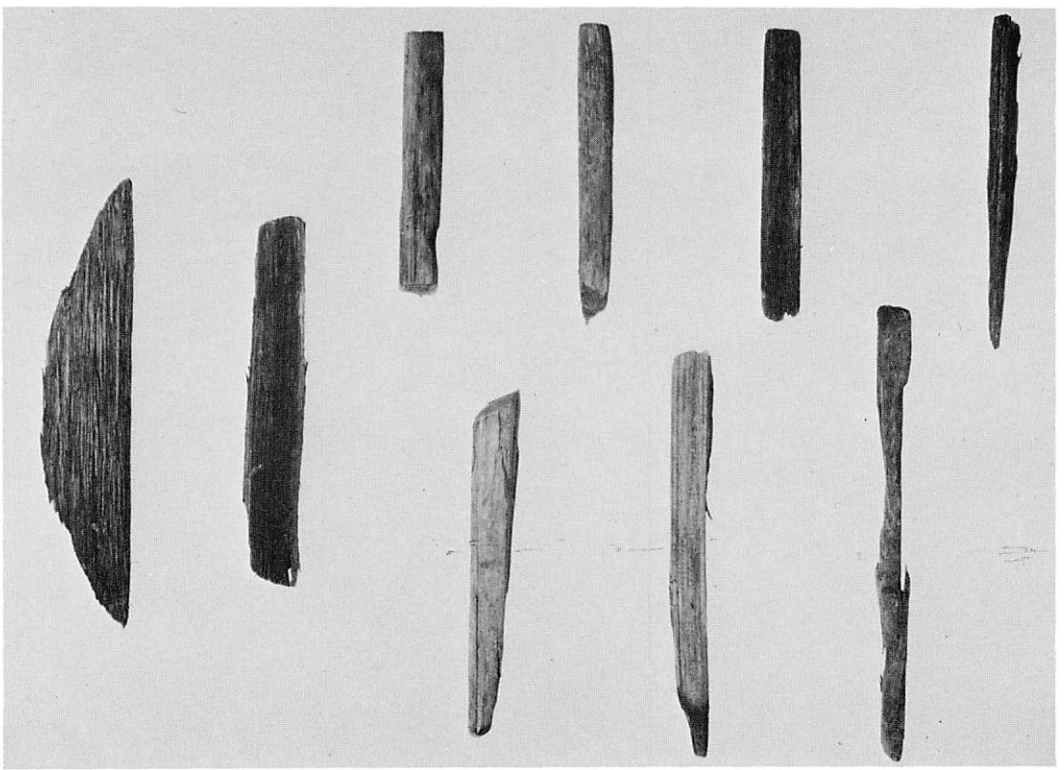
a 出土須恵器



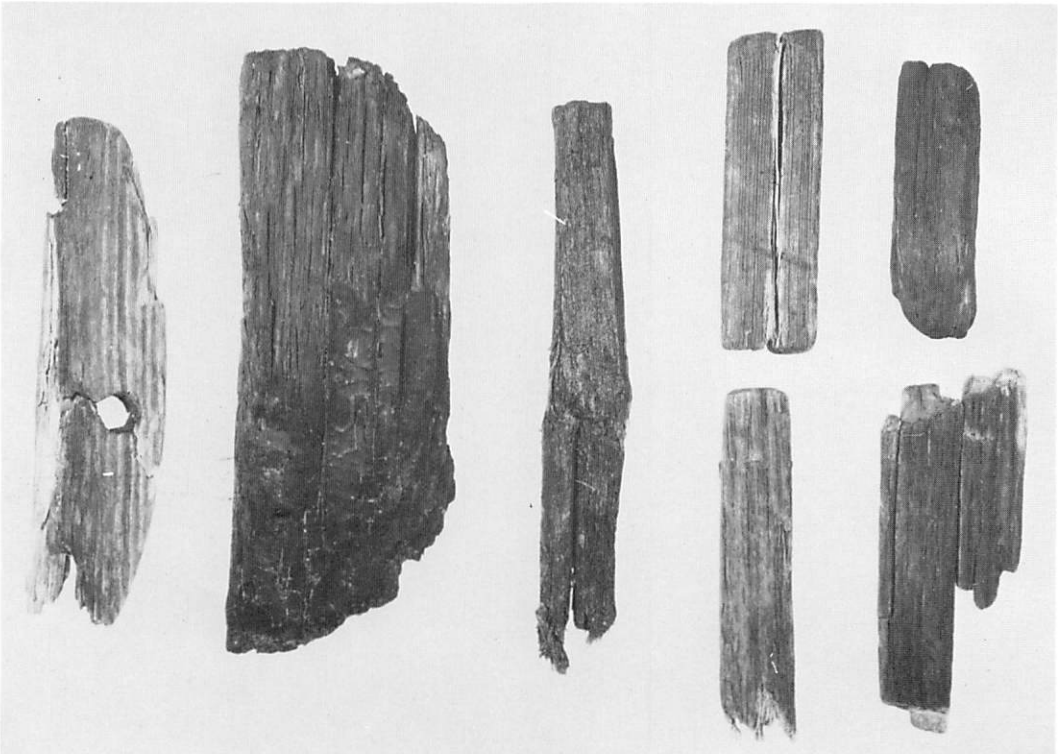
b 出土土師質土器，青磁，白磁，その他



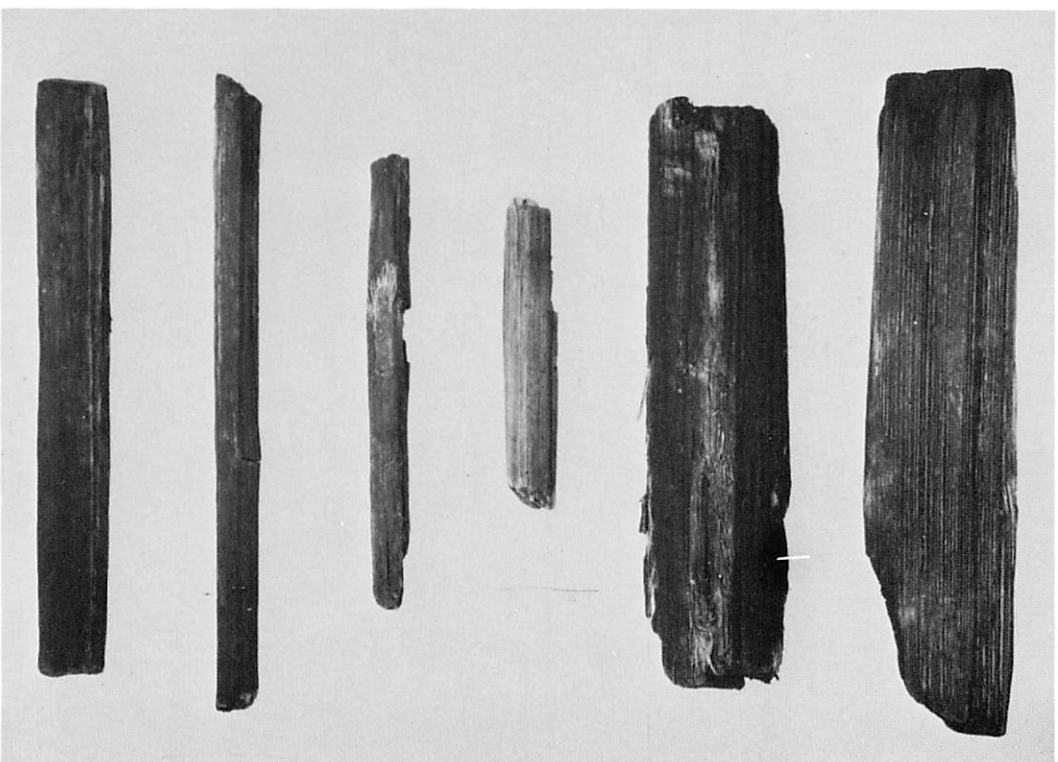
a 出土木製品



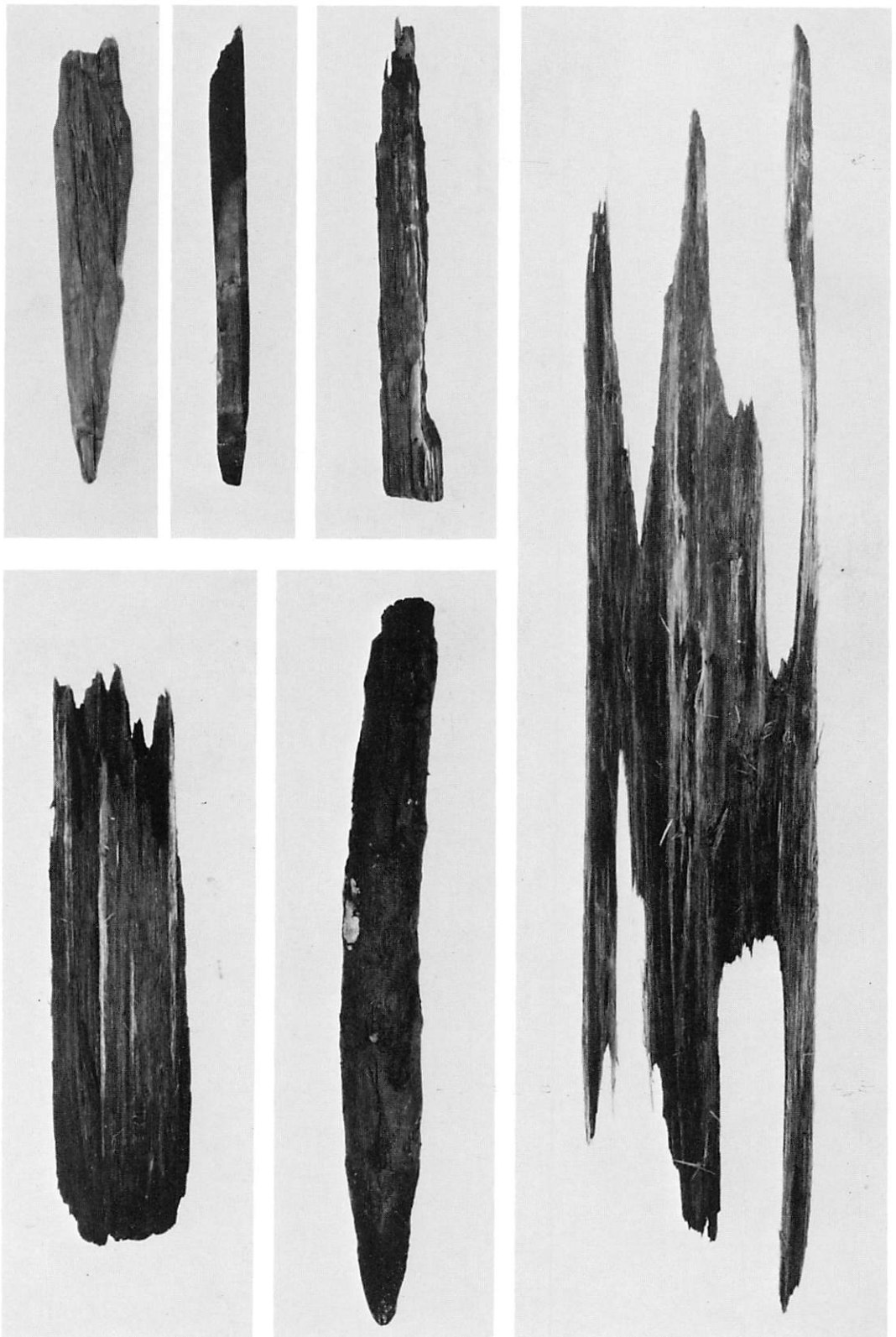
b 同　　上



a 出土木製品



b 同　　上



出 土 木 製 品

昭和54年3月発行

安芸国分尼寺跡

—第2次調査概報—

編集発行　広島県教育委員会

印刷所　株式会社柳盛社印刷所